

と、内々は廣い京都中で、こんな羽織の似合ふのは、自分を差措いて外に誰も居まいとでも思つてゐるらしかつた。

すると、唐突に夕立がざあつと降つて來た。八郎右衛門は、羽織の事も光琳の事もすっかり忘れて慌てて逃げ出して來た。そして堤側の或る農家の軒に駆け込んで、ぶつぶつ呟きながら鶯のやうに濡れた肩を氣にしてゐた。

そこへ光琳が杖をついてぼつぼつやつて來た。八郎右衛門は何よりもずぶ濡れになつた金更紗の羽織が氣になつてたまらなかつた。さも自分の事のやうに、

「なぜ走らはらんのや。羽織が濡れるやおへんか。」

と口を尖らせた。

光琳は冷やかに笑つた。そして、

「老人は躓くと危うてな。」

と、たつた一言言つたきり、羽織の事などはおくびにも出さなかつた。

儉約人

備前の新太郎少將が、ある時お微行で岡山の町を通つた事があつた。普魯西のフレデリック大王は忍び歩きの時でも、いつも握り太の杖を揮り廻して、途々懶者を見ると、

「こら働きをらんか。」

と嘸鳴りつけて、厭といふほど尻つ邊を杖でどやしつけたものださうだが、新太郎少將はそんな杖を持たなかつたから、城下の人達は尻つ邊を叩かれる心配だけはなかつた。

少將は或る家來の屋敷前を通りかかつた。その折屋敷の主人は、二三の下男を相手に、頬冠りに尻を端折つて屋根を這ひ廻つてゐた。岡山人の頭に婁らぬ智慧が一つ巢をくつてゐるやうに、岡山の家といふ家には、瓦の葺き合せに名も知らぬ草が生えてゐる。それを取除けようとして主人は埃だらけになつて働いてゐたのだ。

主人は殿様のお通りだと聞いて、その仕事着のまま、屋根から滑り下りて門外に躊躇つた。少將はじろりと流し目に埃だらけの頭を見た。そして、

「屋根の繕ひ、大儀ぢやの。」

と言つて、有合せの小柄こづかを褒美に取らせた。主人は殿様のお賞めに預かつたのだからといつて、その日は一日屋根を這ひ廻つて、日の暮方まで下りて来ようとしなかつた。

翌朝殿様からわざわざお召しがあつた。主人はそれを聞くと「ほう、また御褒美かな。そんな事になると、今度は隣家の屋根まで手を延ばさなくちやなるまいて。」と、こんな事を思ひ思ひ登城した。

新太郎少將は氣難しい顔をしてゐた。

「そちは昨日下男と一緒に屋根を繕つてゐたな。骨折りは察するが、身分不相應な働きぢやて……」

と言つて、かやうの事は下賤の者のなすべき働きで、知行取りは別にしなければならぬ仕事がある筈だ。あんな事が流行はやつては、家中の風儀が悪くなるからといふので、その男は長の

暇を取らせられた。

畫の交換

文學者や畫家の許へは、なんぞと言つては書いたものを強請ねだりに来る輩が少くない。とりわけそれに幾らかの市價があるといふ事になると、色々の手段てだてを盡して引出しに来る。

この頃京都の畫家T氏の畫が値が高いので、その手許へは取替へ引替へ色々の事を言つて畫を描かせに来る者が多いさうだ。先日こんな事があつた。

それは幸野楳嶺の幅を持合せてゐる男が、一度ひまな時にその畫を鑑定して貰ひたいと言つて来たのから起きた事で、滅多に人に會はないこの畫家も、外ならぬ師匠の畫の事なのでやむなく會ふ事にした。

その男は楳嶺の畫を抱へて入つて来た。畫は尺八か何かの隨分手の込んだ密畫で、出来も

決して悪い方ではなかつた。

「これや立派なもんや。」とT氏は言つたが、ちよつとした出来心から一言お上手が言つて見たくなつた。「宅にも、以前からこんな出来のが、一幅欲しいと思つてましたんやが、さて欲しいとなると、なかなか手に入りませんでなあ。」

その男は目の前の機会を取逃さなかつた。

「そんなにお氣に召しましたか。實はこの幅は手前共の床の間には大き過ぎて困つてゐるところなんです。で、一つ何でも結構でございますから、先生の小幅と御交換が願へましたら……なに、ほんのちよつとした小幅で結構でございますから。」

「成程な。」T氏はにやにや笑ひ出した。「交換と言つたところで、手の込んだ師匠の密畫と換へるのやさかい、私が粗末な略畫を描いたんぢや師匠に濟まんし、いつそ換へるなら、私もこの大きさでこの位の密畫を描かんらんが……。」

「いや、まことに有難うございます。」

その男は呻に頭を下げた。疊の目は一度に皺くちやになつて笑ひ出した。

「それぢや、お宅の床の間には、師匠のこの幅は懸らんで、私のは懸る事になりますな。同じ大きさの幅でゐて。」T氏はちよつと窄口をして笑つた。「ところで、私が描くにしても、この位の密畫やと四五年は懸るさかい、この幅はまあ持つて行んで、それまでお宅に懸けとSLTやS。」

落書

むかし王献之の書が世間に評判が出るにつれて、なんとかして無償でそれを手に入れようといふ、蟲のよい事を考へる向きが多く出て來た。

さういふ狡い輩のなかに、一人頓智のいい若者がゐた。彼は白い切り立ての紗で、特別仕立の上つ張りのやうなものを拵へ、それを着込んでにこももので王献之の許へ訪ねて行つた。王献之はそれを見ると言つた。

「良い紗だな。こんなの一腕を揮つてみたら……。」

若者はきさくに上つ張りを脱いで、書家の前に投げ出した。

「無けなしの錢で拵へたものだが、貴方になら何を惜しまう、一つ思ひ切り腕を揮つてみて下さい。」

王猷之は大喜びで、いきなり筆を取つて、草書楷書と手當り次第に好きな字を書き散らした。

「近頃になく良く出来た。お蔭で思ふ存分腕が揮へたよ。」

書家が筆を下においたかと思ふと、若者は手を伸ばして、その上つ張りをさつと搔つ拂ひざま、いきなり駈けだして行つた。だが、少し遅かつた。門を出る頃にはもう弟子の誰彼に追ひつかれて、上つ張りは滅茶々に引き裂かれ、若者の手には片袖一つしか残つてゐなかつた。

大統領夫人

米國の大統領ウイルソン氏は、二度目の今の夫人を迎へてからは、毎日曜日には一度だつて教會へお参りするのを忘れたことがない。——實際あの齡でゐて、あのやうに若い美しい後添を貰ふ事の出来たのは、外ならぬ神様のお蔭で、幾度お禮を言つたつて、言ひ過ぎるといふわけのものではない。

先日獨逸の潜水艦問題が起きた時、ウイルソン氏は色々心配の餘り、幾日か徹夜をして仕事に精を出した。で、その問題も先づ無事に片がつくと、大統領は久振りて夫人の腕によりかかつて教會に行つた。

教會にはあいにく神様がお不在だつたので、若い牧師が留守番をしてゐた。(事によつたら、その牧師が居たせゐで、神様の方が逃げ出されたのかも知れない。) その牧師はいつも

判り切つた事を長つたらしく喋り続けるので名高い男だつた。

その日も牧師は神様のお仕事のお聴を長々と述べ出した。なんでもその説によると、地面に起きる事も、海の上に持上る事も、何一つ神様の攝理でないものはない。近頃米國の近海に起きた獨逸潜水艦問題の如きも、みんな基督が心あつて行つた事だといふのだ。

「さうかしら。ぢや、基督はちゃんと潜水艦の事まで御存じなんだな。」ウイルソン氏は睡さうな眼で牧師の顔を見ながら考へてゐたが、そつと夫人の方を振り向いて「私にはどうもあの人の言ふ事がさつぱり判らん。」と呟いた。

夫人は氣の毒さうに、三毛猫でもあやすやうに大統領の頭を撫でて言つた。

「ぢや、歸つてゆつくりおやすみなさい。すると、少しは善くなつてよ。」

この言葉は日本でもそのまま眞理で、實際牧師のお説教を聴くよりも、しばらく睡つた方がすつと利益になる事が多い。だが、唯一つ感心なのは、ウイルソン氏に解りかねた牧師のお説教が、どうやら夫人には了解わかめられたらしい事だ。猫の聲、あかんぼの聲——すべて男に解らないものを讀みわけるのが、女の偉いところである。

旅 錢 代 用

書家細井廣澤がまだ若かつた頃、ある日僧侶が一人訪ねて來た。

「私は房州某寺の住職でござるが、先生の御作を戴いて、永く寺寶として後に傳へたいものだと思つて存じますので。」その男は所禿ところばのある頭を叮嚀に下げた。「甚だ勝手がましいお願ひではござるが、百幅ほど御寄進が願へますまいか。」

廣澤は自分の書いた物で、佛様に結縁が出来るなら、こんな結構な事はなからうと思つて安受合に引請けた。そして僧侶を待たせておいて、直ぐその場で書き出した。

三十幅四十幅と書いてゐるうちに、廣澤はそろそろ厭になり出した。佛様のお引立て極樂に行つたところで、そこで好きな書が書けるかは疑はしいし、それに佛様が書を奉納したからといつて、善根だと見てくれるかどうか判らなかつた。

廣澤は五十幅目を書き畢ると、草臥れたやうに筆を投げ出した。

「これで止しにしませう。もう厭になりましたから。」

僧侶は驚いて、うろ覚えのお經の言葉など引張り出して色々頼んでみたが、廣澤は二度と筆を執り上げようとしなかつた。

後になつて聞くと、廣澤がその折寄進した書が、房州路のあちこちの宿屋に一枚づつ散らばつてゐたさうだ。理由を質してみると、あの僧侶が道筋の宿屋々々で、旅籠錢の代りにその書を置いて行つたといふ事だつた。

廣澤は善い事をした。慈悲深い佛様の手をも洩れた賣僧を一人助けた上に、自分の書が田舎の房州路でさへ旅籠錢の代りになるといふ事を知つたのだから。

主人と番頭

去年の夏の事、亞米利加にはいつにない暑い日が續いた。何事も金錢で始末がつけられると思つてゐる富豪にとつて、暑さは眞實苦手であつた。

富豪といふ富豪は、みんな體一つを持てあまして、歐羅巴の方へ逃げて行つた。アンドリユー・カアネギイもその仲間に洩れず、歐羅巴行き支度を取掛つた。支度が出来ると、支配人の一人を呼び出した。

「私はこれから歐羅巴の方へ避暑旅行に出掛けたいと思つとる。どうもこの暑さではやり切れんからな。」

「それは御結構な事で……」

支配人がお愛想を言ふと、カアネギイは氣の毒さうに支配人の顔を見つめながら言つた。

「この暑い盛りに、君一人を残しとくのはまつたく氣の毒さ。だが、私が船に乗込んで埠頭を離れるとき、どんな好い氣持であるか、そんなことは思はんやうにしてくれなくつちやならんぞ。」

「どう仕りまして——」支配人は軽く頭を下げた。この男は長年カアネギイに使はれてゐる

だけに、よく富豪の氣心を知つてゐた。「その代り貴方様も、お留守中私がどんな好い氣持でゐますか、そんな事はお思ひにならんやうに願ひます。」

茶 匙

大阪にS氏といふ名高い實業家がゐる。そのS氏が中學時代に、ひどく世話になつた教師がある。その後教師は職に離れて、色んな事に手を出してみたが、多くは失敗續きなので、S氏はそれが氣の毒さに、泣きつかれるままに二度ばかり合力をした。

教師はそれを資本に、何か事業をもくろんだらしかつたが、それも結果が悪かつたかしてまたS氏の應接間へひよつくりと出て來た。そして閩際に立つて叮嚀に胡麻鹽頭を下げた。物が欲しくて來たものは、閩際に立ち停つてお辭儀をする。喧嘩がしたくて來たものは、閩際に一足に飛び越えるものだど知つてゐるS氏は、直ぐ老教師の用事を見ぬいて苦い顔を

した。

「貴方にも困りますな。さう繁々おいでになつては。無論私は以前御厄介になつた事があるし、今は幾らか融通もつく身分ですから出来るだけはお盡したいが……」

と言つて、S氏は机の抽斗から紙入を取出した。そしてその中の幾枚かを紙に包んで、老教師の前に出した。

「今日はこれでお歸りが願ひたい。そして今後は私の事などは一切お忘れになるやうに。」

老教師はその紙包を戴いた。そしてどんな事があつてもS氏の名前だけは忘れまいと胡麻鹽の頭を幾度か下げて引下つた。

それから一週間ほど経つて、S氏は或る骨董物の賣立會で、茶匙を一本二千圓で買つた。茶匙がそんな値打のあるものかどうか、S氏はよく知らなかつたが、道具屋がさう言つたから、それに違ひはあるまいと思つた。

S氏は二千圓を拂つて茶匙を受取つた時、覺えずはつと思つた。

「自分はこなひだ、以前の教師が困つてゐるのを見ながら、つい金銭の出惜し^{だし}みをした。そ

れが今二千圓も出して茶匙一本を買ふなんて、なんといふ矛盾した事だらう。」

と氣がついてみると、どうしてもその茶匙を弄くる氣になれなくなつた。

で、その後は「良心」が吃驚するといけないからと言つて、茶匙は道具箱にしまひ込んで減多に見ない事に決めてゐる。

實業家S氏に教へる。もつと善い「良心」の保護法は、その茶匙をそのまま老教師に呉れてやる事だ。すると、恩人に物を恵んだといふ満足のほか、茶匙がほんたうは十圓の値段もしないものだといふ事を知ることが出来る。

タフトと子供

亞米利加の前大統領タフト氏が、先日或る街の四辻で、自動車からのつそりとあの大きな圖體を運び出すと、そこに立つてゐた八つばかりの子供が前に出て来て、叮嚀にお辭儀をす

るのに出會した。

「これはこれは鄭重な御挨拶だね。」タフトはメリケン粉の粉袋のやうに、はち切れさうな顔を歪めて笑つた。「坊はさうして街を通る人に、みんな御挨拶をするのかい。」

「いいえ、小父ちゃん、僕がお辭儀するのは、自動車に乗つてゐる人ばかりだよ。」子供は相手の大きな圖體に見惚れながら言つた。「親父がいつもさう言つてら、自動車の旦那衆だけには忘れんやうにお辭儀しろつてね。だつて自動車に乗つて来る人、みんなうちのお客様だもの……」

タフトの顔にはいくらかがっかりした色が見えた。正直者の大男は、子供心にも俺が前の大統領だといふ事を知つてゐて、お辭儀するのだなと思つてゐたのだつた。

「ぢや、訊くが、お前の親父の職業は何だね。」

タフトは子供の顔を覗き込むやうにして訊いた。

子供は白い齒を出して笑つた。

「當てて御覽よ、小父ちゃん。」

「さうだな。」

前の大統領は不得手な外交問題でも始末するをりのやうに、顔を顰めて考へた。

「さうだ、自動車の修繕屋でもあるかな。」

「違ふよ、小父ちゃん。」と子供は不足たらしく鼻を膨ませて言った。「うちの親父は葬儀屋だよ。」

葬儀屋だと聞いて、タフトが自分が亡くなつたをりの後始末を頼んだかどうかは知らないが、この問答では綺麗にタフトが負けてゐる。すべて大人と子供と向き合つた場合、勝利は多く子供の方にある。

女の辛抱

攝津大椽の女房のお高婆さんといふと、名代の口喧しい女で、弟子達の多くはおとなしい

大椽の前では、日向ぼつこをする猫のやうにのんびりした氣持でゐるが、一度襖の陰から、お高婆さんの皺くちやな顔が覗くと、首を竦めてきよときよとする。

弟子達が大椽について淨瑠璃の稽古をする時は、婆さんはいつもちよこなんと側に坐つて横合からさんざ憎まれ口をたたく。すべて女といふものは、滅多に善い批評家になれつことはないが、心掛一つで疵探しの皮肉家にはなれるものだ。

實を言ふと、お高婆さんもその皮肉家の一人で、伊達太夫などは、稽古のたんびに、随分こつ酷くこき下されるばかりか、どうかすると、

「おまはんは、食意地が張つとるよつて、そいでそないに息切れがするのやし……」

と、随分つらい思ひをさせられることがあるさうだ。人間といふものは、頭に水氣が多いとか靈魂に牛乳の臭ひがするとか言つて貶されても、大抵の場合笑つて済まされるものだが、ただ胃の腑のことになるとさうはゆかない。えて喧嘩になりがちなもので、伊達太夫が辛い思ひをするのに何の不思議もない。胃の腑は頭よりも靈魂よりも人間にとつて急所だからである。

そのお高婆さんが、嫁入當時多くの女が経験するやうに、(女としてはなんといふ有難い経験であらう。) 酷く姑に苛められた事があつた。お高さんは或る晩寝物語に、しくしく泣きながら、それを自分の良人に打明けて話した。

大椽は黙つてそれを聞いてゐた。その頃丁度「帯屋」を語つてゐたので、その翌日からお絹が姑のおとせに苛められるくだりに、女房の寝物語の調子を使つて語つてみると、情合がいつもよりかよく出てゐるといつて、大層な評判を取つた。

大椽は宅へ歸ると、一部始終を話して、女房に鄭重な挨拶をした。するとお高さんの顔が急に反古のやうに皺くちやになつた。

「師匠のためになる事やつたら、私お母はんにとどないに言はれたかて辛抱しまつさ。」

正直なもので、女といふものは、褒めて置いたら、どんな辛い事でも辛抱をする。そしてまたどんな善い事でも、男に褒められなかつたら、滅多に善い事だとは思はない。

金びか革

實業家のM氏はこの頃大連へ行つたが、用事が済むと、毎日のやうに骨董屋あさりを始めた。何かしら掘出し物をして、好者仲間の度膽を抜かうといふ考へなのだ。

植民地には人間の質物が多いやうに、骨董物にもいかさまな物が少くない。そんな間をかき捜すやうにして、M氏は二つ三つの掘出し物をした。

「これでまあ、大連まで来ただけの効があつたといふもんだ。それに値段が廉いや。やはり目が利くと損はしないものだよ。」

M氏は皺くちやな掌の甲で、その大事な眼を摩つて悦んだ。そして骨董屋の店先を出ようとして思はず立ち停つた。

それはほかでもない、薄暗い店の隅つこに、金びかの板のやうな物が目についたからだ。

M氏はまた入つて来て亭主を呼んだ。

「ちよつとあの金ぴかを見せて呉れ、何だねあれは。」

「へへへ……たうとうお目にとまりましたか。唯今御覽に入れます。」亭主は立ち上つて、

その金ぴかを取り出して来た。「何だか手前共にも一向見當がつかないんですよが——」

見ると、羊の革を幾枚か貼り重ねて、裏一面に惜しげもなく金箔を押し込んだものなのだ。

M氏の頭は、それが何であるかを考へる前に、直ぐその利用法を工夫し出した。一體茶人といふものは(M氏は自分を實業家と同時に、茶人でもあると思つてゐる。)大黒天の落した頭巾を拾つても、それを神様にかへさうとはしないで、直ぐ茶巾に仕立直しをしたがるものだが、M氏もその例に洩れず、この金ぴかな革を茶室一杯に敷いて茶でも點てたらなあと思つた。

「朝吹や益田めが、さぞ膽を潰すだらうて。」

M氏はそんな事を考へて、たうとうその金ぴかの革をも買ひ取つた。

それを見た或る物識りの男が、

「これは喇嘛僧が使つてる威儀の物ぢやないか。こんな物の上に坐つたら、主人もお客も一緒に罰が當らうて。」

と言つて嚇すと、M氏はけろりとした顔で問ひ返した。

「喇嘛僧といふのは、いつ頃のお方だね。」

喇嘛僧はいつ頃のお方でもよい。罰が當つたら、その罰をも薄茶に溶いて飲んでしまふがよい。茶人は借金の證文をさへ、茶室の小掛物にする事を知つてゐる筈だから。

大雅の拍子木

南畫家富岡鐵齋老人の幼友達に、京都は新町丸太町邊に住んでゐる丸兵といふ傘屋の爺さんがゐる。

爺さんはいつも仕事場に坐ると、

「俺が一日怠けでもしようもんなら、京の奴ら、みんなびしょ濡れになるやろう。かはいさうなもんや。」

と獨言を言ひ言ひ傘を貼つてゐる。實際爺さんの心算では、傘貼りは一ばん人助けの仕事らしいが、それに少しも嘘はない。なぜといつて、京都人は靈魂よりも、着物の方がずつと値段の張つてゐる事をよくわきまへてゐる人間だから。

その爺さんの家に祕藏の拍子木が一つある。それには池大雅が例の達筆で、

「火の用心」

と書き残してゐる。それが鐵齋老人の耳に入ると、(老人は名代の金鼈だが、耳で聞えぬ事は目で讀む事が出来る。)いつもの癖でなんとかして自分の手に入れたくなつて來た。

鐵齋老人は久振りに傘屋を訪れた。そしてきのふあつた事かなにぞのやうに蛤御門の戦話を^{はまぐりごもん}して、二人とも目頭に涙を浮べて喜んでゐた。話に油が乗つて來ると鐵齋老人は例の大雅堂の拍子木の事を持出して、あれを譲つて呉れまいかと切り出した。

傘屋の爺さんは貼り立ての傘に油を塗るやうに、皺くちやな掌で顔を撫で廻した。そして

「よろしおす。傘屋におしたところで、何の役にも立ちよらんが、あんさんとこやと拍子木にも値打が出ますやろからな。」
と、二つ返事で承知をしてしまつた。

老人は拍子木を貰つた禮に、何を返したものだらうかと色々思案の末が、やはり佛手柑のやうな山水を描いて、いつもの禿山の代りに、精々木立のこんもりした所を見せて贈ることに決めた。——なんとといふ立派な考へであらう。どんなにどつさり立木を描いたところで、木は有合せ物で、誰から苦情が持ち込まれるといふわけでもないのだから。

狂 人

アメリカにオアイス・スキンナアといふ聞えた俳優がある。浪漫的な藝風で、倫敦や巴里や伯林などで興行した時も、相應に評判を取つたものだ。

この俳優が、ある時紐育の舞臺へ出るために、夫人と一緒に、その頃住つてゐたフィラデルヒヤから紐育行きの汽車に乗込んだものだ。

スキンナアは汽車中の二時間ばかりで、今度の持役の臺詞を、すっかり覚え込む積りで、外套の大きな隠しから臺詞書きを引張り出した。そして低聲でそれを暗誦し出した。時々顔を擧めたり、鼻先で掌をばつとあけたりして。

夫人はいつもの事なので、良人の方には見向きもしないで、せつせと鞆くつしたを編んでゐた。女といふものは鞆を編む時には、

「ほんたうに私は親切者だわ。一寸の暇も無駄にしないで、こんなにして家の人の物を編んでるんだもの。」

と思ひながら針を運ぶものだが、ついその「親切」を見せびらかす積りで、鞆の寸を餘り長くするので、良人は永久に足の裏が鞆の底に届かぬやうな事になりがちなのだ。

夫人が編みさしの鞆を、膝の上に引伸ばして、じつと良人の足と見比べてゐると、後から、右肩をちよいちよい突つくものがある。振向いてみると、髪の毛の縮れた五十婆さんで、手

には十五六の小娘の読みさうな戀愛小説を持つてゐた。

婆さんは夫人に耳打をした。「お氣の毒さまですね。私すっかり身につまされつちまつた。と言ふのはね……」と小説本を大事さうに畳みながら「家の人もちやうど御主人と同じやうな病氣でね。」

スキンナアは狂人と見違へられたのだ。だが、怒るにも及ぶまい。すべての女は、自分の亭主以外の男子は、大抵狂人か馬鹿だと思つてゐるのだから。

鼠の貿易

攝津の御影に住んでゐる男が、國許に相應な田畑を持つてゐるので、小作米の揚つたのを汽車で送らせて、御影の家で貯へてゐるのがある。そんな田畑があるなら、それを賣拂つてその金で白米を買つたならよかりさうなものだが、その田畑は亡くなつた親父が残してくれ

たものだけに、その男の自由にもなりかねるらしい。

御影の家には、米を貯へる倉が無い。御影にだつて倉の附いてゐる家は無事もないが、そんな家は得て家賃が高い。で、その男は送つて來た米俵を、内庭に高く積み、その上へ大きな金網をかぶせて鼠除けをしてゐる。

ところが、この頃の夜長にふと氣がついてみると、金網の中に何かぱりぱりと音をさせて米を齧つてゐるものがある。その男が蠟燭をつけて俵の下を覗いてみると、大きな鼠がぴきかくれてゐた。

男は金網をすつと調べてみたが、何處に一つ毀れた所もなかつた。で、この鼠は以前子鼠であつた頃、網の目を潜つてちよろちよろ走り込んだものだと言つた。

だが、さる物識りの説によると、基督が言つたやうに人は麵麩のみで生きるものでないと同じく、鼠も米のみで生きる事は出来ない。人間に宗教が要るやうに鼠には水氣のある菜つ葉が必要だ。

その菜つ葉を鼠がどうして獲たかといふと、それは朋輩の力を借りて、臺所の隅から持つ

て來て貰ふほかには仕方がなかつた。彼等は長い間金網の内と外で米と菜つ葉とを交換してゐたのだつた。

畫家と名妓

光村利藻氏がまだ全盛を極めてゐた頃、その須磨の別荘には、色々な骨董物が澤山置かれてあつた。だが、主人利藻氏は、古い骨董物ばかり弄くつてはゐないといふ證據に、その真中に若い女を一人置いてゐた。女は美しい豆千代であつた。

その頃畫家のT氏は、度々招かれて利藻氏の別荘に行つたものだ。そして言ふまでもなくよく畫を描いた。利藻氏と豆千代と、豆千代の可愛がつてゐた三毛猫とは、T氏の身邊を取巻いてじつと畫が出来上るのを待つてゐた。利藻氏と豆千代とは、畫がよく解るやうに時々感心したやうに頷いたり、小首を傾げたりしてゐたが、なかでも三毛猫が一番正直だつた。

畫が始まると、背を圓くして直ぐに居睡りをし出した。

佛蘭西の作家モリエールは、自分の作物が出来上ると、先づ婆さんの女中に讀み聞かせてみて、婆さんの解らない點は、幾度か書き直したといふ事だ。T氏もその頃は何か描き上げると、側に居る者を振りかへつて、

「あんた方の眼には、これが何に見えますね。」

と訊いてみて、その返事によつては、惜しげもなく描いたばかりの畫を塗り潰したものだ。

その時もT氏は荒野に貂を配合した繪を描きあげた。そしてそれが出来上ると、例のやうに豆千代を振りかへつてみた。

「あなたには、これが何と見えますな。」

「さあ。」豆千代は當惑さうに美しい眉を顰めて、利藻氏の方を見た。そして低聲になつて、

「旦那はん、あれ狐だつしやろか、それとも狸……」

利藻氏は慌てて豆千代の袖を引張つた。もしか狐だの、狸だのといふ言葉が、T氏の耳に聞えようものなら、畫家は折角巧く出来た繪を塗りくつてしまふかも知れない。それにして

は金屏風が勿體なかつた。

豆千代は利藻氏の顔を見た。利藻氏は掌の上へ指先で「テン」と書いてみせた。豆千代は狐や狸はよく知つてゐたが、貂といふ獸は見た事も聞いた事もなかつた。でも、折角旦那の教へて呉れる事だ、間違ひはなからうといふので、

「先生、テンだつしやろ。」と言つた。

「さうだ、貂だ、貂だ。貂に違ひない。」利藻氏も聲を合せた。

「やつぱり貂に見えますか。」と畫家は安心したやうに筆を置いて笑つた。「ははは……」その笑ひ聲が餘り高かつたので、先刻から居睡りをしてゐた哲學者の三毛猫は、吃驚したやうに眼をさまして皆の顔を見た。だが、笑つたのは、どうやら自分の事ではないらしいので、直ぐに安心して隣家の黒猫の事でも思ひ出したらしかつた。

米人のお國自慢

米國の戰時通信記者として名高いゼエムス・バアンス氏が、歐洲大戰の當初白耳義にゐた折の事、ある日ブラツセルの市街を徜徉さまよいてゐると、前方から獨逸の自動車が一輛、風を切つて飛んで來た。その刹那バアンス氏の頭には、

「奴さん、てつきり獨探だな。」

といふ考へが矢のやうに閃いた。

と、見ると、その後から白耳義の自動車が一臺、獸のやうな唸りを立てて追ひかけて來るのが目についた。

「面白いぞ、どんな藝當をやるだらうな。」

バアンス氏は胸をわくわくさせながら、この自動車の駆けつ競べに見惚れてゐた。

白耳義の自動車は、全速力を出してやつと相手に追着いたかと思ふと、獸が餌を捉へる折のやうに、いきなり運轉手臺を、相手の尻つ骨に乗り揚げて、車臺をも前輪をも滅茶々に押し潰してしまつた。

「巧いぞ。たうとうやつつけた。」

と、バアンス氏は直ぐ現場に駆けつけてみた。

擦り創一つ負はなかつた白耳義の運轉手は、にこにこものでそこらの群集を見廻してゐたが、ふとバアンス氏の亞米利加式の顔が目につくと、いきなり帽子を脱いで頭の上で振りまはした。

「いよう、亞米利加の先生……」と運轉手は大きな聲で我鳴り立てた。「今の藝當だね、あれを何處で習つたと思はつしやる。一年前紐育の大通りで、せつせと辻自動車をこき使つたお蔭でさ。」

「紐育の大通りで習つたからだと言つてたよ。彼奴めが……」

バアンス氏は、それからといふもの、會ふ人毎にお國自慢をしてにこにこしてゐる。アメ

リカ人といふ奴は、巾着切りでも、人殺しでもいい、これはアメリカから習つたのだとさへ言へば、自分の財布を掏られても、女房の心臓を引抜かれても平気で喜んでゐるのだ。

袂に珠數

畫家の田能村直入は、晩年年齡を重ねる事が大好きになつて、太陽曆で八十の齡を迎へてまで二月と経たぬうちに、舊曆の正月が来ると、

「さあ俺も八十一になつたぞ。」
と、すつかりその積りで、他人に齡を問はれると、「たしか八十一ぢやつたかな。」と答へたものだ。

他人がそれをほんたうに受けると、直入はいい氣になつて、盆節季や祇園祭といつたやうに、世間が酒や金勘定に夢中になつて畫家の事などすつかり忘れてゐる頃に、また一つづつ

年齡を殖やしておく。偶にそれに氣づいたらしい相手が、

「へえ、八十八におなりやした？　でも、昨年の春どしたか、八十三やさうに、お聞き申しましたが……」

と胡散さうな顔をすると、直入は急に風邪でも引いたらしく大きな噓をして、

「齡をとると、月日が短うての。」

と、てれかくしを言つたものだ。

四條派畫家のS氏は、この二三年來外へ出掛ける時には、いつも珠數を一つ袂の底へ投げ込んで置く事にきめてゐる。だが、偶に清水へ參る時はあつても、そんな折には袂の珠數はすつかり忘れてしまつて、畫家は觀音様の前へ立つなり、持合せの兩手を合せて、ちよつとお辭儀をする。その兩手といふのは、從來幾度か繪帛のうへで觀世音を半殺しにした事があるので、佛様にとつてこんな怖い物は無い筈だ。

ある人が、そんなに使ひもしない珠數を、何故袂に入れておくのだと訊くと、S氏は、
「俺も御覽の通り齡が寄つたので。」と死神に立聽きをせられないやうに、急に聲を低めて、

「何時、何處で死ぬかも知れんやらう、そないな折に他人が袂を觸つてみて、Sさんは偉いちゃんと死ぬる日を知つてはつて、袂に珠數を入れときやしたと言つて感心するやらう。」と言つたといふ事だ。

ついでにS氏に教へる。今一つ、片つ方の袂には、毎日一錢銅貨を一つ入れておく事だ。頓死でもしたら、そのまま六道錢にもならうし、死ななかつたら、代りに夕刊新聞を買ふ事が出来る。夕刊には畫家の知らない、いろんな面白い世界が載つてゐる筈だ。

子福者の歌姫

維也納の或る醫者の報告によると、(醫者といふものは色々な報告をする。我々はその報告に依つてナポレオンが産毛の多かつた事や、醫者自身が餘り人間の事に通じてゐないのを知る事が出来る。)ある塊太利の婦人は、四十五歳の間に三十回妊娠して三十六人の子供を

生んだ。そのうち四回は双兒を産み、一回は三兒を生んだといふ事だ。

今市俄古に住んでゐる、米國のプリマ・ドンナ、シユウマン・ハインク女史は無論聲樂家としても聞えてゐるが、それよりも子供のたんとある音樂家として名が通つてゐる。

ハインク女史が舞臺へ立つて、ちよつと愛嬌笑ひでもしてみせると、吃度大向うから、「お母さん、しつかり頼みますぜ。」

といふ掛聲がかかる。成程乳房のだらりと垂れた工合から、下腹のだらしなさ加減が、誰の眼にも子福者とは直ぐ判る。

ある時、若い畫家が女史を訪れて来て、肖像畫を描かせて呉れと頼んだ。「お母さん」はぶくぶくした自分の下つ腹の邊を眺めて、逡巡してゐると、若い畫家はにこにこしながらちよつと愛想を言つた。

「お氣遣ひなさいますな、奥様出来るだけ正直にやりますから。」

「いえいえ。」女史は笑ひながら首をふつた。「私何も正直に描いていただきたいんぢやありませんわ。どうぞ出来るだけ御眞振りをお見せなすつてね。」

雷神とお茶

茨城の北相馬郡桑原村といふ土地に、傳右衛門といふ爺さんが居た。一體茨城の人は、人間では水戸義公より外に偉い人はなく、山では筑波山の外に山らしい山はないと思つてゐるのが多いが、傳右衛門もその一人で、仕合せと文字を知らなかつたから、義公の方はあきらめて、閑さへあると筑波山へばかり登つてゐた。

ある夏、草鞋作りにも飽きたので、ひよつくり思ひ立つて、また筑波山へ登つた。すると俄に空が曇つて雷がごろごろと鳴り出したかと思ふと、夕立がざあつと降つて來た。傳右衛門は慌ててその邊の掛茶屋に駆け込んで、雨上りを待つ事にした。

見ると、茶店の縁端には、誰についだともない茶が一つ置いてあつた。咽喉の渴いてゐた傳右衛門がそれを飲まうとすると、茶店の媼さんは慌ててとめた。

「止しにさつしやれ。お前にはこつちのを上げますべい。それは雷さまに上げてあるのであらう。」

傳右衛門が不思議さうな顔をして、雷さまはお茶が好物なのかと訊くと、
「お好きだともさ。」媼さんは茶飲友達の噂でもするやうに、「雷さまは、えらお茶が大好きだよ。」

「へえ、そんなに好きなのかい。」と傳右衛門は感心したやうに首を振つた。「そんなだつたら家へ來れば浴びるほど茶を饗應むかひまつてやるだに。」

それから五六日経つと、大雷が鳴つて雨がどしや降り降りだして來た。壱扶斯の熱度表のやうにぎくしゃくした雷光が、ぴかりと光つたかと思ふと、大隈侯のやうな顔をした雷さまが、にこにこもので一人傳右衛門の家へ轉げ落ちて來た。

そしてしばらく臺所の附近をうろうろ探し廻つてゐるやうだつたが、茶が入れてなかつたのを見ると急に難しい顔をして、藥罐の湯を臺所一杯にぶち撒けて引き揚げて行つた。

傳右衛門は吃驚して尻餅をついたが、でもまあ、雷さまでよかつた。それが大隈侯だつた

ら、代りに酒でも菓子でも出せと言つて、そのまま居据つたかも知れなかつた。

名士と好物

露西亞の文豪プウシキンは、自分が職業的詩人でないのを見せるために、他人と話す時には成るべく文學の事などには觸れないで、馬だの、骨牌だの、料理だのの事ばかり話してゐたといふ事だ。

その癖亞刺比亞馬とはどんな馬をいふのか、一向他の馬との區別がつかず、骨牌の切札とはどんなものか、それを知りもしなかつた。とりわけひどいのは料理で、佛蘭西式の本場の庖丁加減よりも、馬鈴薯の天麩羅が好きで、何かといふとそればかりを頬張つてゐた。

名士の好物調べもちよつと面白いものだが、ここに少しばかり挙げると、頼山陽は餅、梁川星巖は羊羹、佐藤一齋は蕎麥、大橋訥庵は鰻の蒲焼、鈴木重胤は五目鮓が大好きであつた。

菊池容齋は寺納豆、藤田東湖は訥庵と同じやうな鰻の蒲焼、森春濤は蠶豆、生方鼎齋はとろろ汁、椿椿山は猪、藤森弘庵は鼠のやうに生米を嚙むのが好きでたまらぬらしかつた。

ある西洋の學者の説によると、人間一生の間に食べるものは、七千二百九十一貫六百四十八匁の食物と、六千六百四貫六百四十匁の飲料とださうだ。女は男よりも比較的菓子が好きで、女一生の間に食べる菓子類は、ざつと見積つたところで四百十九貫三百二十八匁を下るまいとの事だ。

女の名家がどんな物を好くかといふ事は、餘り興味のない事で、女は男のお世辭とお菓子とが等分に好きだと思へば間違ひはない。だが、どちらも人によつて砂糖の加減を甘くしなくてはなるまい。

切手蒐集家

××縣選出の國民黨代議士I氏は、二十萬圓の資産を有つてゐる。——と言ふと、あの素浪人がと、頭からてんで相手にしない人があるかも知れないが、事實二十萬圓といふのは、I氏自身の算盤から割出した勘定だから、間違ひつこのある筈がない。ところが、よくしたもので、大抵の人はそれを信じない。

尤も偶にはそれを本當だと思ひ込む者がないでもない。それは貧乏人といふ階級で、貧乏もどん底まで落ちると、相手の懐加減を見通すくらゐは何でもなくなるが、中途半端の貧乏人になると、自分の前に立つ誰でもが、富豪のやうに見えるものなのだ。かういふ半端な貧乏人が國民黨には少くない。

さういふ人達は、I氏の景氣のいい懐加減を聞くと、朋輩の誼よしみで幾らか立て替へて貰へないものでもあるまいと思つて、つい口をきり出してみる。するとI氏は物を呉れる者に附物の、鷹揚な態度でポケットに手を突込んだかと思ふと、何かしら掴み出して、黙つて相手の掌に載せて呉れる。——見ると、使ひ古しの郵便切手である。

I氏は名代の切手蒐集家だ。今の英國皇帝は世界切つての切手道樂で聞えた人だが、I氏

の集め方は、英國皇帝のとはずつと毛色が異つてゐる。ジョージ五世のは、國々の珍しい切手ばかりを選び好みをするのだが、I氏のはそんな事に頓着なく、どんな有り觸れた物でも構はない、手當り次第に集めるので、かうして掻き集めたのが、今では積り積つてざつと二十萬枚はある。

尤も中には何處へ出しても負を取らない珍しいのも交つてゐるが、一番多いのは今普通にある五厘、一錢五厘、三錢……といつたやうな切手で、I氏はその値段を勘定するのに成るべく他人に判り易いやうに、そしてそれよりもまた成るべく自分に判り易いやうに、一枚一圓といふ値をつけてゐる。一圓の切手がざつと二十萬枚、疑ひもなくI氏の財産は二十萬圓程ある事になる。

栗鼠は胡桃を勘定するのに、自分一流の數へ方を知つてゐる。I氏がそんな方法を知つてゐたところで、少しも差支はない。

俳優の盗み

英國で少しは名前も知られてゐる俳優某が、ある時倫敦の煤ぶつた市街をぶらぶら歩いてゐると、大きな紙包を抱へ込んで、ある雜貨屋から飛び出して來た男が、ふと俳優の顔を見るなり、急にここにこしてその前に立ち跨かつた。

「いよう、久振りだな。」その男は言つた。「馬鹿に艶々した顔をしてるぢやないか。何を食つてるんだね、近頃は。」

その俳優は名代の食道樂で、數ある珍味のなかで、とりわけ牛の舌と女の心臓とが一番好きだつた。紙包を抱へた男が「何を食つてるね。」と訊いたのは、その實「どんな女が出來たかな。」といふ積りであつたらしかつた。

「うむ、雛兒ひよっこばかり食つてるのさ。」俳優は可愛らしい口もとをして言つた。「君も知つてる

だらうが、今度の劇に僕の持役は、そら、泥的と來てるだらう。實を言ふと、僕はこの齡になつて、まだ泥坊をした事がないんだから、巧くやれるやうにと思つて、毎日宅の雞小舎から雛兒を盗んではそれを料つてるんだがね。」

「へえ、雛兒を盗んでるつて毎日……」

友達は大事さうに紙包を左の腋下に持ち替へながら、可笑しさうに首を振つた。

「うむ、毎日食つてるが、今日でもう三十羽も食つたかな。お蔭で顔もこんなに若くなり、泥的もすつかり巧くなつたよ。」

俳優は自慢さうに、雛兒を盗み出す自分の兩手でもつて顔を撫でてみせた。

教育家氣質

「安全第一」といふ事は、よく亞米利加雜誌の廣告に使はれてゐる文句だが、その發明は米

國よりも日本の方がずつと早い。そしてそれを發明したのは小心者の癖に懶惰者である「教育者」といふ階級である。

大阪市の——中學で、ある實業家の子供が時計を盗まれた事があつた。時計は親譲りのかなり古い物で、疲れ切つた針は一晝夜を廻るのに二十四時間と三十分程かかつたが、それでも螺旋を巻くのさへ忘れなかつたら、時計は教育家のやうに悲しさうな溜息を吐き吐き動いてゐた。

その時計が學校で盗まれたのを聞くと、校長は自分の同僚が首を縊りでもしたやうに悲しさうな顔をした。そしてあんな忠實な古時計を、持主のポケットから盗み出した奴は、見つけ次第狗殺しのやうに叩きのめしも仕兼ねない意氣込みで、廊下を歩き廻つてゐたが、暫くすると急に立ち停つて、何か教育上の大發見でもしたやうな晴々しい顔をした。

校長は盗まれた生徒を呼び出した。そして時計を盗まれたのは全く氣の毒だ、これからは成るべく盗まれないやうにしなければならぬ、それには良い方法があると言つて、十二時を打つた時計のやうに、兩足を机の下で揃へて卓子に頼杖をついた。

「方法つて、どう致すのです。」

生徒は校長の顔を覗き込んだ。

「どうもしない、時計を持たないのさ。つまり時計など持つから盗まれるやうな事になるんぢやないか。」

校長は失くなつた古時計の代りに、こんな立派な教訓を授けるのは、差引勘定には合はないが、その勘定に合はないところに、教育者の職分があるとでもいつたやうな高尚な顔つきをした。

「時計さへ持たなかつたら、盗まれる心配はないのだ。」——流石は教育家で、言ふ事がちゃんと理に合つてゐる。そして一つ合理的に言つたら、時計は持つてゐても、學校へ來さへしなかつたら、盗まれる心配はない事になる。

時計と生徒にとつて、學校は實際危険な所さ。

牧師の杖

ある牧師がすっかり上機嫌で、いつものやうに、杖を小脇に抱へ込んで、市街をぶらぶら散歩してゐると、ふと途の片側に乞食が一人衝立つて、往來の人にお鳥目をねだつてゐるのが目についた。

牧師は自分の住つてゐる界限に、乞食がうろつかうなどは夢にも思はなかつた。(何處の國でも宗教家といふものは、富豪のなかに住んで、そして「貧乏」を説くのが好きなものだ。)で、つかつかと其の側に歩み寄つたかと思ふと、いつもお寺でするやうに、額へちよつと手を當てがつて、

「神よ、この哀れなる者をお恵み下ささう。」
 と言つて、そのまま立ち去らうとした。

「ちよいと旦那……」乞食は牧師を呼びとめた。「御祈禱は有難うがしたが、神様はとても俺らが許には御座らつしやるまいから、此方から出かけますべし。近頃御無心な次第ぢやがその杖をお貸し下さるまいかな。」

乞食が垢塗れの手で、その杖に觸らうとするので、牧師は慌てて、それを引込めた。杖といふのは、さる富豪の寡婦さんが贈つてよこしたもので、匂の高い木に、金金具が贅澤に打ちつけてあつた。牧師は死ぬる時は天國にまで持つて行く積りで、この世では成るべく汚すまいとしていつも小脇に抱へ込んで歩いてゐたものだつた。

牧師は叱るやうに言つた。

「基督も『窄き門より入れよ』とおつしやつたぢやないか。お前達がこんな杖など持つてたら、窄い門に入るのに邪魔になるよ。」

「へへへ……」と乞食は無氣味な笑ひ方をした。「御心配さつしやりますな。その窄い門とやらに入ります前に、俺ら杖を賣る事を知つとりますからな。」

指 畫

むかしから、畫家がよく指頭畫といふ事をする。(亡くなつた夏目漱石なども、京都で初めてそれを見て、ひどく感心したといふ事だ。)大雅堂が或る時その指頭畫を試みて、いくらか得意さうな顔をしてゐると、傍にゐた伊藤介亭(介亭は仁齋の三番目の子だ。)がじつとそれを見て、

「大雅さんには、近頃よい事をお覚えになりましたな。田舎へ旅立ちでもして、筆などちよつと見當らない場合には、重寶なものでござらうて。」

と冷かしたので、大雅はひどく恥ぢ入つて、二度ともうそれを試みようとはしなかつたといふ事だ。

むかし南唐に、李都といつて書畫に巧みな人があつた。大きい文字を書く折にはわざと筆

を用ひないで、帛をぐるぐる巻きにして、その先に墨汁を含ませて、べたべた塗なくるのをひどく自慢にしてゐたといふことだが、これなどもまあちよつとした思ひつきの戯れといふものだ。

ピ ア ノ の 前

オルガ・サマロフ女史が或る時音樂會を開いた。女史がいつも出演する折のやうに、その夜も聴衆は會場にぎつしりと詰つて、身動ぎの出来ない程であつた。

そこへ髪の毛の長い、おしやれな紳士が一人入つて來た。一體どこの芝居でも、どこの音樂會でも、おしやれな男や女は、大抵人が一杯につまつた頃に、のこのこと入つて來るものなので、彼等がかうして満場の視線を自分の身一つに集めることに、ぞくぞくした嬉しさを感ずるのだ。

だが、その紳士は餘り念入りに髪の毛に香水を振りかけてゐた故で、入つて來るのが二分方遅過ぎた。何處を見渡しても、椅子一つ空いてゐないので、紳士は少しどぎまぎした。

もともと見え張りの男だけに、椅子が無いと気がつくといきなりその晩の演奏者サマロフ女史の許へ駈けつけた。

「どこも椅子が無くて閉口してゐるところなんです。貴女のお口添へで一つ捜していただけないでせうか。」

女流音楽家はじろりと相手の顔を見た。

「私の坐る席が一つ明いています、なんならお使ひになつても苦しくありません。」

「有難う、何處でございます。」

「ピアノの前なんです。」

女史は氣もない風で言つた。紳士は吃驚して、魚のやうに眼を一杯に見開いた。

土を圓めて

むかし支唐禪師といふ坊さんが、行脚をして出羽の國へ行つた。そして土地の禪寺に逗留してゐるうち、その寺の後方に、大きな椎の木が枯木があるのを發見した。

禪師は寺の住職に勧めて、その枯木を根から掘らせた。だんだん掘つて行くうちに、椎の木の中が深い洞穴になつてゐるのに氣がついた。

樵夫の斧が深く幹に喰ひ込むやうになると、急にばたばたと音がして、洞穴の中からは何か飛び出したものがある。見ると番ひの鼻で、厭人哲學者のやうなうつろな眼をしてじつとそこらを見廻してゐたが、暫くすると背後の藪の中へ逃げ込んでしまつた。

「奴さん、巢をつくつてたんだ、洞穴の中へ。」

こんな事を言ひ言ひ、樵夫がやつと枯木を伐り倒すと、なから土で拵へた鼻の形をした

物が三つまでもころころと轉がり出した。よく見るとその一つには毛が生えて、ちよつぶり撮んだやうな嘴も伸びかかつてゐたさうだ。

禪師の説によると、梟は土を捏ねて、それを暖めて雛つ兒にするものださうで、禪師は古人の歌や傳説などを引出してそれを證明した。側で聽いてゐた人は禪師の物識りに驚いたといふ事だ。

梟が土を圓めて雛つ兒に仕立てるかどうかは疑はしいが、人間にはよくこんな眞似をするのがある。とりわけ批評家が天才を捧へあげる手際はよくこれに似てゐる。

難船した人

ある男が、由緒のある古いお寺に詣つた事があつた。そこには壁一面に夥しい金ぴかの額が懸つて、額のなかにはついぞ見知らぬ人達の顔が描いてあつた。

參詣したその男は、案内の僧侶に訊いてみた。

「ちよつと伺ひますが、これは何をなすつた方々でございますか。」

「さればさ。」僧侶は高慢さうな咳拂ひをした。「この方々はみんな海で難船した人達ぢやが平素神様御信心の御利益で、不思議にも生命拾ひをなすつたのぢや。その御禮にとあつて、こんなにして額をあげてござるのぢや。」

その男は、それを聞いて、も一度額の顔を見直した。成程誰も彼もが、神様のお力でも藉りなければ、陸の上でも難船しさうな顔をしてゐた。

「いや、よく解りました。ところで……」とその男は皮肉さうな眼つきをして僧侶の顔を見た。「平素神様を御信心致しながら、それでも難船して死んだ人達の額は、何處に懸つてをりますかな。」

僧侶さんは鬼のやうに口をもぐもぐさせてゐたが、なんとも答へなかつた。實際答へやうはなかつたのだ。何故といつて、そんな人達の額を懸けるには、お寺の壁は餘りに狭かつたから。

選舉人

こなひだ米國の大統領選舉があつた、その少し前、ブライアン氏がミゾリイ州の或る集會に招かれて行つた事があつた。ブライアン氏は好きな演説さへ出来る事なら、地獄へ旅立ちをするのも厭はないといふ人だ。

ブライアン氏はそこで一場の演説をした。そしてすっかり好い氣持になつて自分の椅子へ着くと、聴衆のなかから農夫らしい人の好ささうな顔をした男が一人出て來た。

「へへえ、先生様でござらつしやりますか。」その男は叮嚀に頭を下げた。「私選舉ちふと、いつでもあなた様に投票するだが、今度もまたさせて戴くかな。」

「さうか、それは辱い。」

ブライアン氏は農夫の律義さうな言葉を聞いて、にこにこしながら手を出した。農夫は嬉

しさうにそれを握つた。その掌の大きさといつたら、小麦の大束を握つた餘りで、政治家の首根つこを締めるくらゐはなんでもなささうだつた。

「先生様のおためなら、俺らいつだつて投票するだが、彼方からも此方からも持掛けるんで定めし先生様もお困りでがせうな。」

「いや、どうしてどうして。」とブライアン氏は苦笑ひをした。「私が困るのはそんな結構づくめぢやなくつて、實は私のためにはこれまでだつて一度も投票した事もなければ、今後ですまいといふ連中なのさ。」

支那の活動寫眞

佛蘭西の新古典派の作家ピエル・ルイスの説によると、現代の文明は、古希臘の文明に比べて何一つ進歩してゐない。哲學も、藝術も、道德も、宗教も、みんな希臘にあつたまま

少しも違つた點がない。人間は長い間花を作るやうにせつせと女につき込んでゐるが、その女でさへもが希臘の女と比べて少しも新しくなつてゐない。廣い世間をこまざぐつてみて、希臘に無かつたものと言つたら、先づ巻煙草くらゐのものださうだ。

巻煙草は實際希臘にも無かつた。希臘人は煙草の代りに欠伸をしてゐたか、哲學を研究してゐたか知らないが、煙草が出来てから、人間は初めて閑潰しの所在なさを隠すことが出来るやうになつた。が、巻煙草のほかにも今一つ希臘に見られない結構なものが現代にある。それは活動寫眞である。

色々な點で現代的な支那人は、一體に活動寫眞が好きだ。ところが、不思議な事には、支那にある活動小屋のまじなのは大抵米國人の經營で、そんなのを數へ立ててみると、かれこれ八十餘りもあるが、それが揃ひも揃つて觀客の一萬五千をも容れる事が出来ると聞いてはちよつと驚かれる。

支那人の觀客は滅多に觀覽席の椅子を買はない。椅子は大抵一弗半の定めださうだから、支那人にとつては、そんな勿體ない事は出来ない。支那人は一弗半の持合せがあつたら吃度

天國をでも拂ひ下げるやうな素晴らしい事を仕出かすに相違ない。基督の身體を銀三十で賣つたあの碌でなしは、支那人の掌から一弗半を受取る事が出来たら、二つ返事で天國をも抵當に入れかねまい。

支那人の多くは野球でも見るやうに、思ひ思ひに蹲踞んだり、突つ立つたりして活動寫眞に見惚れてゐる。ある時さうした小屋へ行き合はせた日本の同業者が、支配人の米國人に會つて、

「安い椅子席でも拵へたらどうです。これぢや餘り見つともないやうだから。」
と言ふと、支配人は顔を擧めて手を振つた。

「どうして、どうして。支那人に椅子でもあてがつてみなさい、餓ゑ死するまでも、椅子に腰を下してじつと寫眞に見とれてまさ。」

支那人のこの心理を知る事が出来たなら、もう一ぱしの支那通だと言つていい。

獨木舟

清教徒の英雄クロムウェルに髑髏が二つある。一つはオックスフォード大學に、今一つは倫敦の考古博物館に秘藏せられてゐる事は、いつぞや書いた事があつたやうに思ふ。學問の力は偉いもので、かうして英雄の亡くなつた後からその髑髏を二つ迄も拵へる事が出来る。

この頃大阪府下の鯉江町の土底から掘り出された獨木舟がある。ある學者は千年までの物だと言ひ、また或る學者は千五百年以前の物だと言つて、一つ舟にざつと五百年の差異をつけて平氣で濟ませてゐる。だが、さる物識りの説によると、あんな事になつたのは、學者の鑑定が足りないのでもなんでもなく、掘り出された獨木舟が悪いのださうだ。

その悪い獨木舟も、いよいよ京都大學の手に入つたらしいが、舟の圖體が餘りに大きいので、どんなにして取寄せたものかと、大學の考古學者達は寄つてたかつてその方法に苦しん

でゐる。

それを聞いた皮肉屋のN博士が、

「どんなに大きいたつて、獨木舟を取寄せるなんか造作もない話ぢやないか。」

と言ふので、思案に餘つた連中が、

「ぢや、どうするんだね。」

と訊くと、

「切り離すのさ、二つか三つかに。いくら考古學者だつてこのくらゐの智慧があつてもよかりさうなものぢやないか。」

と言つて、けろりとしてゐる。

流石はN博士で、言ふ事が面白いが、然し博士でもまだ思ひつかない無難な方法が一つ残つてゐる。それは獨木舟をその儘もとの土の中に掘り埋めてしまふといふ事だ。——すべて自分の手におへない物は、わざと見ないに越した事はないのだから……。

狂人になる書物

伊東胡蝶園の祖父伊東玄朴は蘭書の蒐集家として聞えてゐたが、数多いその書物のなかで唯一つだけ風呂敷包みにして、その上に封印までもして他人に見せなかつたものがあつた。仲よしの高野長英が、それを見つけて、

「どんな本だ。ちよつとでいいから見せてくれ。」

と強請むと、慌てて膝の下に押し隠して、

「いけない、いけない、これを読むと狂人になる。」

と、顔色をかへて断るので、

「へえ、狂人になる。氣味の悪い本だな。」

と、長英はそんな本を読まないうちから、狂人になりかけてゐた頭をふつて不思議がつたと

いふ事だ。

玄朴が封印をしてゐた本は、ほかでもない和蘭版の「民法」の本で、舊幕時代にこんな本を読まうものなら、さしづめ狂人にでもならなければなるまいと、お医者だけに玄朴は考へたものらしい。尤もの事だ。日本には今だに狂人になる本はどつさりある。

子供

紐育に愛蘭生れの音楽家キクトル・ヘルバルトといふ男がある。最近この音楽家に男の兒が生れた。その折ヘルバルトはもう相當の子持であつたが、それでも嬰兒の顔を見ると可愛さに堪らぬやうに、接吻をしたり頬ずりをしたりした。

仲間の友達が來ると、音楽家は危つかしい手つきで、その嬰兒を抱いて來て見せびらかしたものだ。嬰兒はベエトオベンの樂譜や、ワグネルの樂劇の上へ、口の悪い批評家のやうに

時折は水をしかけるやうな事があつた。

友達は嬰兒の顔を覗き込むやうにして、

「いい兒だ。ほんとにいい兒だよ。君にとつちや立派な音楽ぢやないか。」

と、いくらかお愛想のつもりで言つたものだ。

「音楽だつて。」ヘルバルトは眩しさうな眠つきで友達の顔を見た。「さうかも知れない。だが、少くともオペラぢやないね。まあ、早く言つてみれば行進曲かな。昨宵なんか夜つびて我鳴り通しなんだからね。」

佛語通

露西亞の若い、ハイカラ紳士が氣取つた身振りて巴里の料理屋に入つた。別段腹が空いてもゐなかつたが、滑かな佛蘭西語で獻立を注文するのが、嬉しくてならなかつたのだ。

紳士が稍、反身になつて、卓子の前の椅子に腰をおろすと、鷺鳥のやうに白い上つ張りを

着た給仕人がやつて来て注文を聞いた。紳士はちよつとその方へ顎をしゃくつて、

“Une portion de biftek aux pomme de terre.” (馬鈴薯のきのビンテキ)

と一皿命けて、「どうだ、巧からう。」といつたやうに四邊を見廻した。

すると、丁度帳場にかかつた古時計が悲しさうに午後三時を打つた。紳士はそれを自分を褒めて呉れたもののやうに思つて、わざわざ懐中時計を引張り出して、今正規の時間に合はしたばかりの針をまた古時計の通りに引直した。古時計は年を取つて氣短になつてゐたので三十分ばかり進んでゐた。

直ぐ隣の卓子にまた一人お客が入つて来た。指先で軽く給仕人を呼んで “Garçon biftek pomme” (ちよつと、じゃがテキをね。) と言つて、どかりと椅子に腰をおろした。何處から見ても五分の隙もない巴里の子である。

「隣の奴め、馬鈴薯テキと言つたな。」と思ふと、ハイカラ紳士は顔から火が出るやうに恥づかしくなつた。「Biftek pomme——それに比べると、俺の佛蘭西語はまるで鼠のやうに

長い尻尾を生やしてら。」

紳士は泣き出しさうな眼つきをして古時計を見た。古時計はナポレオン三世のやうな氣忙しさうな顔をして、露西亞人などには頓着なく息をはずませてゐる。紳士はいつになく露西亞が戀しくなつて來た。

だが、その露西亞へ歸つて來ると、紳士は何處の料理屋へ行つても、巴里へでも聞えさうな大きな聲で「Bitek pomme」と誂へる事にきめてしまつたさうだ。

これは物の本に出てゐる話だが、それと似てゐるのは、能樂の囃子方の六合某氏が西洋料理屋に入つて皿を註文する時、ライスカレイを誂へるのに、

「おい、辛子のおじやを持つて來い。」

と言つたといふ事だ。某氏が佛蘭西語で註文しなかつたのは無理もないが、「辛子のおじや」は聞いて呆れる。恥ぢよと言つたところで、恥ぢもすまいから困る。

墓の中

法隆寺の雷爺さん、北畠治房老人などが、寄つてたかつて北畠准后の墓に相違ないと言つて、わざわざ發掘にかかつた室生寺の境内から、碌な物といつては何一つ出て來なかつたのは面白い。もしか親房卿から今の北畠男爵にいたる迄の歴とした系圖でも出たら、法隆寺の老人も煙草入れのやうな口をあけて喜んでに相違ないが、惜しい事をしたものだ。

支那の三國時代に鍾繇といふ名高い書家があつた。その男が書いた草書は、

「飛鴻海に戯れ、舞鶴天に遊ぶが如し。」
といつてあるから、こんな人から手紙を貰つたところで、假名が振つてなかつたら少しも讀めなかつたかも知れない。

この鍾繇が先輩の章誕に、祭鬘の筆法を訊きに行つた事があつた。すると、章誕はそれを

惜しんで、どうしても教へて呉れなかつた。

間もなく章誕が死ぬると、鍾繇は小躍りして喜んだ。そして人に知られぬやうに、こつそりその墓を掘りかへして、棺のなかから祭鬘の祕書を盗み出した。鍾繇の書が急に巧くなつたのはそれからだといふ話だ。

ある人が元の張伯雨の墓を掘つてみた。すると、中から青い表紙の珍しい書物が二冊見え出した。

「これだこれだ。自分が見たいと思つてゐたのは。」

と、泥のへばりついた手でそつとその一冊を取出した。そしてそれを附近の乾いた石の上に置いて、今一冊の方を取出さうとすると、その本はもう影も形も見えなくなつてゐた。

「おや、をかしいな……」

その男はいくらか氣味が悪くなつたので、一冊だけであきらめて、また以前のやうに墓へ土をかけて置いたさうだ。

是眞の啖呵

むかし柴田是眞が、鈴木南嶺の添書を持つて京都へやつて來た。「笠につく蝶と一つに都入り」といふのは、その時の句ださうで、一向詰らないものだが、こんな句よりも京都に來て山陽や景樹や豊彦などに會つたのは、彼の生涯にとつて忘れられない事柄だつた。

是眞はその折鹽川文麟をも訪ねた。文麟は、

「折角の珍客や、一獻やりまほか。」

と、是眞を木屋町の料理屋に案内した。

料理屋の二階からは、紫ばんだ東山の夕景色が繪のやうに見えた。灰色の靄の底に、鴨川の水が白く流れてゐるのも捨て難い趣であつた。文麟はそれを指さしながら言つた。

「どうぞ。お江戸は將軍家のお膝下やさうですが、こない美しい景色はたんとおすまい。」

先刻から文麟の土地自慢に、蟲の居所を悪くしてゐた是眞は、それを聞くと、
「ほんまにたんとおへんな。」

と、調弄氣味からかひきみに京訛きやうなまりをちよつと眞似てみせて、

「だけどさ、京都にはこの景色が描ける畫家はたんと有るまいて。」

と、江戸つ子一流の藝えいい皮肉を投げつけたので、文麟は悄氣かへつたさうだ。

それは京都の景色の事。今大和の法隆寺村に隠棲してゐる北畠治房男の、狂人染みた眼の色から、顎鬚の長く胸元に垂れかかつた恰好を、ある洋畫家がひどく褒め立てておいて、

「如何です、私に一つ描かせて下さいませんか。」

と頼んでみた事があつた。

すると老人はじろりとその畫家の顔を見た。

「お前は油繪描きだつたな。」

「さうです、油繪描きです。」畫家は無氣味さうに答へた。

「五六年司馬江漢でも研究しろ。」老人は喚く様に言つた。「そしたら描かせんとも限らん。」

肉 饅 頭

近頃名高いチャアルズ・シュワツプが、カアネギイと他の富豪との比較をした事がある。比較といふのは、何も財産の事などについてではない。身代較べはいつの代でも稅務署の役人か、さもなければ貧乏人のする事である。

シュワツプはかう言つてゐる。——ここにうまさうな、肉饅頭が一皿置いてあるとする。

他の富豪だつたらそれを見ると、

「や、うまさうな肉饅頭があるな。おい、皆來て見ないか。乃公はこれから肉饅頭を食べるんだよ。」

と、そこらに居合はす番頭手代をかり集めて、そのなかで好い氣になつて皿の物をばくづくにきまつてゐる。ところが、カアネギイだけは、そんな眞似をしない。この男は皿の肉饅頭

が目につくと、

「や、肉饅頭があるな。おい、皆来て乃公と一緒に食べないか。」

と言つて、吃度そこらに居る店の者を呼び寄せて、一緒に食べようとするに相違ない。

と、かう言ふと、そんじよそこらの富豪達は、雀のやうに口を尖らせて、

「そんなだつたら、なにもカアネギイに限つた事ぢやない。私だつたら肉饅頭どころかライスカレイがもう一皿あつたつて、それも皆と一緒に食べて見せる。そして食後には金口の巻煙草を一本づつ呉れてやつてもいい。」

と言ふかも知れないが、まあ、ちよつと待つて欲しい。

つまり資本主が儲けを得たなら、それを使用人と一緒に分けて楽しむといふのは、カアネギイから始まつた事で、これ迄の富豪達の知らなかつた事なのだ。だからシユワツプは言つてゐる。

「カアネギイの爺め。肉饅頭を半分食つただけで、すつかり新時代の資本家になりすましてしまつた。」

王羲之と扇賣り

京都といふ土地は、妙な習慣のあるところで、少し文字を識つた人が四五人集まると、吃度畫箋紙か畫絹かをのべて寄書をする。亡くなつた上田敏博士は、そんな時にはきまつたやうに、ヘラクリトスの、

「萬法流轉」

といふ語を書きつけたものだが、それが少し堅過ぎると思はれる場合には、「松の葉」のなかから氣の利いた小唄を拾つて来て、それをさらさらと書きつけた。

博士は詩歌も巧かつたし、警句にも富んでゐたから、自分の頭から出たそんな物を書きつけたらよかりさうなものなのに、どうしたものか、いつでも「萬法流轉」と「松の葉」の小唄を借用してゐた。

むかし、王羲之が周山に住んでゐた頃、近所に團扇賣りの婆さんがゐた。六角の團扇でちよつとしゃれた恰好をしてゐた。ある時王羲之の家へも賣りに來たが、この主人は唯の一本も買はないで、おまけにその團扇へべたべたと樂書をした。(どこの國でも、文學者や畫家などといふ輩は滅多に物を買はないで、直ぐに樂書をしたがるものなのだ。)

それを見ると、婆さんは火のやうに憤つて、折角の賣物を代なしにした、是非引取つて貰はうと懸合つたが、王羲之は黙つて財布をふつてみせた。財布には散錢ばちまの音一つ鳴つてゐなかつた。

「なに、そんなに怒るものはないさ。俺の樂書だと言つたり、誰でも手を出すよ。」

王羲之は落着き拂つてこんな事を言つた。

婆さんはぶつくさつぶやきながら出て行つたが、町へ持つて出るといろいろな人が集まつて來た。

「なに、王羲之の樂書だつて。」

と言つて、めいめいふん奪だり合ひをして、高い値段で引取つて行つた。

婆さんはにこにこもので歸つて來た。そして六角團扇をしこたま抱へ込んで、また王羲之のところへやつて來た。

「さ、遠慮なしに、もう一度樂書をして呉れさつしやれ。その代りには氣に入つたのを一本お前さんに進げるからの。」

原稿集め

今の著作家達は大抵字が拙い。偶に上手な人も無いではないが、そんなのは得て書いてゐる事柄が拙い。とりわけ萬年筆で書くやうになつてから、文字に感じが出なくなつた。

世間にはよく色々の作家の手に成つた原稿を集めて歩く人がある。その人の作物に接しないのなら、印刷せられた書物を読んだ方がよかりさうなものだが、さういふ人達に限つて餘り書物など讀まうとしない。そして拙くても何でも構はない、唯手で書いたものばかりを集

め歩く。

英國の文豪キプリングの手蹟が集めたくてたまらない人があつた。

その人の懇意な書肆で、いつも新版物を見つくらつて、文豪のところへ賣りつけに行く男があつた。キプリングは書物を預かる度に、請取書に署名をするのが例となつてゐた。

「いい物が見つかった。これだけでも結構だ。」

と言つて、その男は書肆から署名入りの請取書を喜んで買ひ込んだ。味を占めた書肆は、要りもしない書物までせつせと文豪の手許に擔ぎ込むやうになつた。

また一人、小説家のヘンリー・ジエームスを訪ねて行つた男がある。空手^{からて}で物を貰はうとする者に附物の愛嬌笑ひを、惜しげもなく小説家の卓子の上にぶち撒けた。

「申しかねますが、先生、唯一枚で結構でございますから、貴方のお書きになりました原稿が戴かれないものでございませうか。」

「原稿？」と小説家は古い往時の話でもする折のやうな顔をした。「原稿とお言ひなのは、手で書いた文字の事なんですか。」

「はい、さやうで……ほんの一枚で結構でございます。」

「それだと、お氣の毒だが有りませんよ。」と小説家は素氣なく言つた。「私はいつも速記者に口授して書かせるので、私の書いたものといつては、先づ校正書くらゐのものでせうからね。」

原稿集めの男がどんな顔をしたかは、私の知つた事ではないが、少くともその翌日からはジエームスの事を善くは言はなかつたに相違ない。ことによつたら跋^{はつ}だと言ひ觸らしたかも知れない。

著書の無心

著述家が書物を出版すると、見ず知らずの人からたくさん手紙が来る。多くは無代で書物を貰はうとする輩で、「平素から貴君を尊敬してゐる。」とか、「御著作は缺かさず讀んでゐ

るが、近頃手許が苦しくて買へないから。」とかいつたやうな文句がよくある。

なかには、郵便切手を二三枚封じ込んで、郵税はこつち持ちにするから、書物だけ恵んで欲しいといふのがある。そんなのに出會した場合、大抵の作家はその郵便切手は預かりつ放しにして、一切取合はない。

かういふ蟲の好い事を言つて寄す手紙の差出人は、十人が八人まで女名前になつてゐる。女といへば大抵の無理は通るものだと思つてゐるらしいが、實際多くの作家のなかには、女名前の手紙には、喜んで返事を書くやうな甘い輩が居ないとも限らない。

米國にアリス・ヘガン・ライス夫人といふ女流作者がある。この人が著作を公にすると、毎度うるさい程いろんな手紙が舞ひ込んで来る。

ある時テキサスの老軍人から來た手紙は「お前は幼い時別れた私の娘ぢやないか。」と産みの娘扱ひに、ぞんざいな言葉で書いてあつた。また二人の男から同時に結婚の申込みを封じ込んだ手紙を受取つた事があつた。

シカゴの或るお婆さんは「私は聾でおまけに啞です。氣の毒だと思ひなら、貴方の書物

を一冊送つて呉れ。」と申込んで來た。これには流石の女流作家も弱らされたが、「私は聾や啞を好かないから。」と返事を出して、やつと免れることができた。

可笑しかつたのは、何處かの小娘の寄した無心狀で、

「先生、あなたの直筆で書いた物を送つて下さい。何卒リチャード・デキスさんや、マリイ・キルキンスさんの眞似をして下さいませ。あの人達は私の切手を取つちまつてよ。」

と書いて、手紙の端にアラビヤ護謄で滅多にめくれないやうに切手が貼つてあつた。言ふまでもなくデキスやキルキンスは、切手を取りつ放しにした連中である。

武器としての謠曲

自分の隣家に謠曲の師匠が住んでゐる。朝から晩まで引切りなしに、鷲鳥の締め殺されるやうな聲で、あたり構はず謠ひ續けるので、その喧しきといつたら一通りの沙汰ではない。

謡曲が済む頃になると、その悴が蓄音機を鳴らし出す。それがまた奈良丸の浪花節一式と来てゐるので、とてもたまつたものではない。

華族と法律とを拵へる事を、許された自由のやうに心得てゐる政府が、何故「音曲」に関する法律だけは打捨り放しにしてゐるのか理由が判らない。短銃は弾一發で人一人しか殺さないが、騒々しい音曲は近所隣の良民をすつかり狂人のやうにしてしまふ。實際自分などは下手な謡曲を聴かされると、氣が荒くなつて直ぐに決闘でも申込みたくなる。

獨逸の宰相ビスマルクが、議會で反對黨のキルヒヨオから、こつ酷く攻撃された事があつた。キルヒヨオは獨逸のお醫者さんだから、その攻撃に謡曲や蓄音機を持込んだ譯でもなかつたが、ビスマルクは鐵瓶のやうに湯氣を立てて怒つた。

で、相手の事務室に飛び込むなり、直ぐ決闘を申込んだ。キルヒヨオは急きこんだ大宰相の顔をじろじろ見て、氣味が悪いほど落着いてゐた。

「いや、御申込みは確かに承知しました。だが、武器の選り好みは申込まれた方の權利にある。ところで……」と、お醫者さんは藥燒けのした指で、棚にある壺の一つを指し示した。

「私はあれを貴方と二人で飲みたいと思ふ。」

ビスマルクは、英吉利製のウキスキイでもある事かと振返つて壺を覗いてみた。壺にはこの政治家の好きな獨逸語で「虎列拉菌の培養液」と書いてあつた。

ビスマルクは、それを見ると、急に悄氣返つてゐたが、都合よく仲裁者が出て来て、決闘は沙汰止みになつてしまつた。

自分は隣家の謡曲家に決闘を申込むくらは厭はないが、武器に「謡曲」でも選ばれはしなからうかと内心びくびくものである。あれはどうかすると、決闘者ばかりか、介添人をも一度に頓死させてしまふから。

利休の夫婦喧嘩

千利休が或る時、昵懇の女を數寄屋に呼び込んで内密話に夢中になつてゐた事があつた。

世間の人は利休といふと、一生涯茶の事しか考へなかつたやうに思ひ違へをしてゐるらしいが、利休は茶と同じやうに、色々世間の事をも考へてゐた男なのだ。

利休の女房は、餘程の癩癩持ちだつたと見えて、亭主が女との逢曳を感じくと、いきなり刀を引つて抜いて、數寄屋へ通ふ路地の木を滅茶苦茶に伐りつけ、おまけに數寄屋に竝べてあつた大切な茶器を、手當り次第敲き破つてしまつた。

ソクラテスの女房は、どうかして機嫌の悪い時には、ひとしきり我鳴りたてた學句のはてが、いきなり水甕の水を哲學者の頭に、瀧のやうにぶち撒けたものだ。すると、哲學者は魚のやうに水のなかで溜息をついて、

「雷鳴のあとに、夕立が來るのはおきまりさ。」
と言つてゐたさうだ。

利休は女房の敲き割つた茶器を、一つ一つ拾ひあげて、克明にそれを漆で繼いだものだ。そして女房のちんちんなどは素知らぬ顔で、相變らず茶を啜つてゐた。

ある人が、その茶器を不思議がつて由緒を訊くと、利休は何氣ない調子で、

「さればさ。茶器などと申す物は、そのままでは一向面白味がござらんから、わざと割つて漆を引いてみました。路次の木も同じ趣向で、あのやうに枝をちよつと伐り透して置きました。」

と言つて、わざわざ立つて障子をあけて見せて呉れたさうだ。

句 讀 點

文章を書くものにとつて、句讀點ほどおろそかに出來ないものはない。合衆國政府はこの句讀點一つで、二百萬弗損をした事がある。

いつだつたか、同國の政府が、外國産の果樹を成るべくどつさり移植して、かうした果物の供給で、餘り外國に金を拂ひたくないといふので、外國産の果樹輸入を無税にするといふ海關税法を拵へた事があつた。

バナナや蜜柑を安く食はうといふには、こんな結構な規則は滅多になかつたが、肝腎の法文を印刷する場合に、どう間違つたものか、外國産の果樹といふ“Foreign fruit plant”といふ言葉のなかに、句讀點が一つ挿まつて、“Foreign fruit, plant”となつて、そのまゝ世間に公布せられてしまつた。

さあ、政府では外國産の果物を無税にしたといふので、蜜柑や、葡萄や、レモンやバナナといふやうな果物が、大手を振つてどんどん入つて來た。それと氣づいた政府が、法文を訂正するまでには、關稅の收入がいつもよりざつと二百萬弗少くなつてゐたさうだ。

句讀點といへば、ある時近松門左衛門のところへ、かねて昵懇の珠數屋が訪ねて來た。その折門左は鼻先に眼鏡をかけて、自作の淨瑠璃にせつせと句讀點を打つてゐた。珠數屋はそれを見ると、急に利いた風な事が言つてみたくなつた。

「何かと思つたら、句讀點をうつておいでなのか、そんなものは漢文には要るかも知れんが淨瑠璃には要らんことぢや、つまり閑潰しぢやな。」

門左はひどく癢にさへたらしかつたが、その折は唯笑つて済ました。それから二三日過ぎ

ると、珠數屋あてに手紙を一本持たせてやつた。珠數屋は封を切つてみた。手紙は珠數の註文で、なかにこんな文句があつた。

「ふたへにまげてくびにかけるやうなじゆす」

珠數屋は「二重に曲げて首に懸けるやうな」とは、随分長い珠數を欲しがるものだと思つたが、早速そんなのを一つ拵へて持たせてやつた。すると、門左は註文書に違ふと言つて、押し返して來た。

蟹のやうに眞赤になつた珠數屋は、註文書を擱んで門左のところへ出掛けて行つた。門左はじろりとそれを見て、

「どこにそんな事が書いてある。二重に曲げ、手首に懸けるやうな、とあるぢやないか。だからさ、淨瑠璃にも句讀點が要るといふんだよ。」

葵の上

260

「今は亡くなつたが、Tといふ東京——学校の教授が、邦楽調査會の用事で、京都にやつて來た事があつた。旅をすると、何かきつと拾ひ物がある世の中だ。T氏が京都に來たのは決して悪い事ではなかつた。」

平家琵琶の檢校藤村性禪氏がまだ生存してゐた頃で、T氏もこの盲法師が波多野流の最後の人である事はよく知つてゐたので、わざわざ宿に招いて平家の一曲を所望する事にした。

藤村檢校は琵琶を抱いて入つて來た。檢校はどんな音樂會でも、平曲だけは別物だといつて、いの一番に語らなければ承知しなかつたものだが、この日は一先づ琵琶を膝の上に置いて世間話をした。世の中には結構な音樂よりも、呆けた世間話でもして聞かせた方が、ずつとためになる人があるのを檢校はよく知つてゐた。

ひとしきりそんな話のはずむと、檢校はやをら琵琶を取上げた。

「何に致します。御所望の曲がありましたら何なりとも……」

檢校は撥をとつて、ちよつと威儀を繕つた。T氏は「さあ」と言つて、白い巻煙草の煙の中で眩しさうに眼を細めてゐたが、暫くすると、

「それぢや、葵の上でもやつて貰ひませうか。」

と言つて、忙しさうにまた煙を吐き出した。

「葵の上を？」

檢校はだしぬけに鼻でも撮まれたやうに、顔中をくしゃくしゃさせた。そしてT氏の側に坐つた相容の方へ首を振り向けた。相容は平氣な顔をして控へてゐた。とんちんかんの多い世間で、一々それを笑つてゐては、とても笑ひきれぬものでないといふ事をよく知つてゐたのだ。檢校はきまり悪さうに言つた。

「源氏には葵の上の巻もあつたやうに存じてをりますが、平家にはございません。尤も小督の曲の前に葵の前といふのが一つありまして……」

261

T氏はそれを聞くと、羅宇屋の釜のやうに、鼻から口から白い煙草の煙を吐き出した。「源氏にある事が平家に無いといふ法はない。是非一つ葵の上を平家の節で聞かせてもらひたい。」

氣の毒な盲法師は、とても自分の手では出来さうにもないと言つて、そこそこに琵琶をしまつて座を立つた。

聾 選 び

ベンジャミン・フランクリンが女房を迎へようとした時、その女の母親は聾がねフランクリンの職業は何かと訊いてよこした。フランクリンはいくらか自慢のつもりで、「新聞記者です。」と答へた。

「え、新聞記者だつて……」女の母親は飛び上るばかりに吃驚した。「新聞記者のやうな、そんな忙しい仕事をつとめてゐる男に、大切な娘は添はせたくないものですね。」母親の積りでは、可愛い娘の事だ、出来る事なら教會の牧師のやうな、日曜日にだけお決りの祈禱をして、あとの六日はぼんやりして過される、閑な男にやりたかつたものらしい。フランクリンの頃には、亞米利加全國を通じて、たつた六種の新聞しか無かつたといふからには、フランクリンの携はつてゐた仕事だつて、忙しいとは言ひ條、たかの知れたものだつたのに相違ない。だが、それすら忙しいからといつて、一度は縁談が破談になりかけたものだ。

ところが、今では女の好みも大分移り變つて、聾選みをするには、成るべく男の職業が忙しいのを好くといふ事だ。著作家や牧師のやうな、始終家にばかり燻つてゐるのは一番の困り者で、出来る事なら、船乗りや海軍軍人のやうな、月の半分か、一年の何分かを、海の上で送つて、減多に家へ歸つて來ないのへ嫁きたがるといふ事だ。

ある日本汽船が、獨逸の潜水艦に沈められたといふ噂の立つた時、ある男がその船の機關

長の不在宅を見舞つた。電報を見せて悔みを言ふと、若い夫人は毀れた玩具のやうに胸をこべこさせて泣き出した。

「貞女かな。」お客はその泣聲を聞きながら思つた。お客といふのは、ハムサラダと貞女とが大好きな男だつた。

ひとしきり泣き止んだ時、お客は機関長の年齢を訊いた。

「ちやうど三十二なんですわ。」

追つかけて平素の好物を訊くと、夫人は低聲で答へた。

「カツレツと尺八が一番好きでございましてね。」

お客は歸り途に、會社に寄つて同僚に確めてみると、夫人の言葉は大抵間違ひで、機関長の年齢は三十七、尺八が好きなのは船長で、不器用な機関長は吹く術さへ知らなかつたさうだ。

夫人が出鱈目を言つたのに少しの不思議もない。永の不在に女は男を忘れてゐたのに過ぎなかつたのだ。尤もカツレツだけは機関長もよく食べさせられた。女といふものは、亭主の

不在には大抵一つくらゐは新しい料理を覚えてゐるものだ。そしてそれを亭主に食べさせる事によつて、不在中に忘れてゐた事くらゐは帳消しができると思つてゐるのだ。

片腕

むかし釣好きの或る江戸つ兒が、鱈を釣りに品川沖へ出た。ちやうど鱈釣りに打つてつけの日和で、獲物も大分あつたので、船のなかで持つて來た酒など取出して少し飲んだ。

ほろ酔ひの顔を擦つたい程の風に吹かせて、その男はまた釣り出した。すると直ぐにちよつと手應へがあつたので、

「おいでなすつたな。」

と、鉤を合はせて、さつと引揚げた。

鉤には、誰かが河豚にでも嚙切られたらしい絲と錘おもりとが引つ懸つてゐるばかりで、鱈らし

いものは躍つてゐなかつた。

その男は、何氣なく糸を繰り寄せると、ちらと釣竿の端が見え出した。

半分ほど引寄せてみると、これはまた結構な釣竿で、自分の持合せなどは、とても比べ物になりさうにもなかつた。

「いい竿だ。大分金目の掛つた拵へだぞ……。」

こんな事を言ひ言ひ、竿の根元まで引揚げると、しつかり握りつめた人間の片腕がすつと揚つて來た。

「や、死人だ……。」

釣好きの男は、覺えず聲を立てて、手を放さうとしたが、捨てるには餘りに結構な釣竿なので、

「氣の毒だが、この竿だけを貰つとくとしよう。」

と、その片腕を捉へて、堅く握りつめた五本の指を解いた。竿から外された片腕は音もなく沈んで行つた。

「金目の懸つた竿だけに、溺れて死ぬる場合にも心残りがして、あんなにしつかりと握り緊めてゐたのだらうて。」

拾つた男は後々までもそのことを思ひ出しながら、そのおなじ竿で鱧を釣り、蟹を釣り、ある時は馴れた章魚を釣つたりした。

山 葵

洋畫家のO氏が友達と一緒に房州に行つたことがあつた。亞米利加の女が巴里を天國だと思つてゐるやうに、東京の畫家や文學者のなかには、天國とは房州のやうな土地だと思つてゐる人も少くなささうで、かういふ人達は、暇と金さへあれば、直ぐ房州へ出かける。

O氏はその前房州へ行つた折、うまい松魚を食べさせられたが、生憎山葵が無くて困つた事を思ひ出して、出がけに出入の八百屋から山葵を取寄せる事を忘れなかつた。

その日勝浦に着くが早いか、O氏は亭主を呼び出して直ぐに「松魚」と言つたが、亭主は闕際にかいつくばつて、「折角ですが、もう一週間ばかりも不漁續きだもんで。」と胡麻鹽頭を搔いた。

O氏等は房州のやうな天國に、松魚の捕れない法はない筈だと、ぶつぶつ呟きながら、次の天津をさして發つた。だが、悪い時には悪いもので、海は油繪かきに當てつけたやうに、松魚といつては一尾も網に上らなかつた。

「去年Yがやつて來た時には、縮ばかし食べさせられたと聞いたつげが……」

O氏等はこんな事を話し合ひながら、馬鈴薯の煮たのばかり頬張つた。言ふまでもなく馬鈴薯は畑に出来るものなのだ。

O氏は馬鈴薯で一杯になつた腹を抱へて、

「だが、山葵をどうしたもんだらうて。」

と、皆の顔を見た。すると一行の誰かが、先年農科大學のI博士が歐洲へ行く時、アルプス登山は草鞋に限るといつて、五十足ばかりそれを用意して行つたが、草鞋は一向役に立たず

持て餘した末、方々の博物館へ日本の履だといつて一足づつ寄贈した事を話した。そしてO氏の山葵もそのまま宿屋に寄附したらよからうと附け足した。
お蔭で天津の宿屋の裏畑には、近頃山葵が芽を出しかけてゐる。結構な事だが、房州のやうな畫家の天國には、少し辛過ぎるかも知れない。

天 國

米國にバアナムといふ宣教師がゐる。土耳其へ渡つて聖書の出版事業をしてゐるが、出版のひまひまには説教もして天國を説く事を怠らない。だが、困つた事には身體が牛のやうに肥えてゐるので、説教がはずむと韃^{たたり}のやうな苦しさうな息づかひをする。

ある時、友達の一人が訊いた事があつた。

「そんなに説教ばかりしてゐると、天國では吃度もてるだらうな。」

「さあ、そこぢやて。」バナナは牛のやうな悲しさうな眠つきをして自分の身體を見まはした。「僕も天國へは上りたいんだが、この圖體ぢやとても上りきれまいと思つてね。」

今早稻田の圖書館にゐるK氏が、聖書學者として同志社に關係してゐた頃、友達の中に頻りと耶蘇教を説いて廻つた事があつた。

「耶蘇教もいいさ。まあ早く言つてみたら生命保険に入つたやうなもんだね。」とK氏は猫のやうな圓い掌で頤を撫でまはした。「死んでみて、もしか天國があつたら、信者のお蔭で昇天を許されるし、よしんば無かつたところで、損はゆかないんだからな。」

細君選擇法

日本郵船會社にKといふ老船長があつた。今は船から上つて、神戸の町外れとかに住んでゐるさうだが、日本人で一萬噸以上の船に乗つたのは、このK氏が最初だといふ事だ。

初めて一萬噸の船に乗つたといふだけなら別に何の事もないが、そのほかにK氏は素敵な發明を一つしてゐる。それは海員の細君選擇法で、この方法で選り分けをすると、滅多に間違ひはない。

「現に自分の部下だつた男で、幾人かこの方法で細君をきめたのがあるが、今ではみんなお蔭で良い女房を持つ事が出来たと言つて、禮を言ひ言ひしてますよ。」

と、K氏は、その方法が有り觸れた見合などの比でない事を自慢してゐる。

一體海員は一月の半分以上を船に乗つてゐる。なかには三月、四月も家庭には歸つて來ないのがあるから、従つて海員の女房といふものは、人並み以上に憤み深い、貞操の堅いものでなければならぬ。男といふものは、自分の女房が酸漿のやうに一室に閉ぢ籠つて、固くなつてゐるのでなければ、外で酒一つ飲む事の出來ない程の意氣地なしである。海員とは、言ふまでもなく到る所の船着きで酒を飲む事の出來る職業者である。

K氏の細君選擇方法は、これと思ふ女があつたら、座敷で見合などしないで、その女が外出をする時、そつと後をつけて行くのだ。そして女が兩側の店を覗き込み、きよろきよろし

てゐるやうだつたら、その女は吃度移り氣なのだから、とても不在がちな海員の女房には出来かねる。そんな折には早く見切りをつけて、ものの半町と後を蹴けないうちに横町へ逸れるなり、理髮床へ飛び込むなりするがいい。このくらゐの不満足なら、鬚を剃るか、頭髪を刈るかすれば直ぐに忘れる事が出来るものだ。

もしまた、女が脇目も振らないで、眞直ぐに歩いてゆくやうだつたら、それこそんだ掘出し物だから、すぐその足で結婚を申込むくらゐに機敏すばしこく立ち廻らなければならぬ。大きい聲では言へないが、餘り延々にしておくと、さういふ女でも、いつの間にか脇目を振る事を覚えるものだからといふのだ。

音 樂 通

音楽は最高の藝術であるが、その音楽の批評家となるには、二つの資格が要る。一つには

音楽が解つてはならない事、二つには解らない癖にお喋りがしたい事、この二つをさへ兼ねる事が出来たなら、立派な音楽批評家となれる。

音楽の面白さは馬でも感じる事ができるが、音楽の上手下手はその道の人にも解らぬのが多い。トドハンタアといへば、名高い数學者でおまけに語學の達人で、希臘、羅旬はいふに及ばず英佛獨伊露の現代語からヘブリウ、アラビヤ、ペルシヤ、梵語などの東洋語にも通じてゐた男だ。

ところが、この語學と數學の達人が、音楽ときては何一つ解らなかつたから可笑しい。師匠のド・モルガンは自分が風琴家であつただけ、トドハンタアが音楽に聾からかなのをよく調弄からかつたものだ。ある日もド・モルガンが音楽の事で何か冗談を言ふと、弟子は頭を掻き掻き言ひわけをした。

「でも、先生、私だつて“God save the Queen……”くらゐはわかりますよ。」
「ほう、わかるか。それならまんざらでもないな。」

正直な師匠は風琴のやうに鼻を鳴らして感心をした。弟子は希臘語とヘブリウ語と、別々

の抽斗に藏ひ込んである頭を反らして、ぐつと氣取つてみせた。

「でも、これは國歌ですからね。」

“God save the Queen”を國歌だといふのに少しも間違つた事はない。だが、トドハンタアは全くの所その音律などは少しも判らなかつた。唯何か音楽が始まると、聴衆が一度に帽子を脱いで起立をするから、そんな折に、やつと、

「ははあ、これは國歌なんだな。」

と、自分も慌てて尻を持ちあげてゐたのに過ぎなかつた。

馬の目潰し

馬政局長官S氏の談によると、當局では、先年の失敗に懲りず、今度また馬券を賣出さうと計畫中だといふ事だ。

「何事も馬を良くするためだ。ちつとやそつと人間が悪くならうが、そんな事くらゐ辛抱して貰はなくつちや。」

といふのが、當局の考へらしい。成程考へてみると、人間は少し良くなり過ぎてゐる。人間が馬のやうに従順に、そしてまた馬のやうに立派な馬鹿者になりきつてゐるのに、肝腎の馬が人間のやうに亂暴で、おまけに人間のやうな自由思想家であるとしたら、人間は少しくらゐ悪くなつても、精々馬の方に氣をつけてやらなくちやならぬかも知れない。

馬をよくするのに、一つの方法がある。それは米國の馬商人が、馬市で取引をする折、賣物の馬を滅多に跳ねたり、飛んだり、不様な眞似をさせないで、

「見さつしやれ、牧師のやうに溫和おとなしくしてまさ。」

と、その溫和しいのを自慢に、成るべく高く賣りつけようがために、發明した怖い悪企みなのだ。

悪企みといふのはほかでもない、馬の眼に細い針を刺し通して、生れもつかぬ明盲にしてしまふのだ。盲になつた馬は、附近が見えないから、今までのやうに物に怯えて跳ねたり、

飛んだりするやうな事はまるでなくなつてしまふ。その手術といふのが、また上手を極めたものださうで、どんなに氣をつけて調べてみても眼の中に少しの疵も見えない。十人が十人盲馬とは知らないで高い金を拂つて購つて行くさうだ。

日本では人間を教育するのに、よくかういふ方法を使つて、成るべく廣い世間を見ないやうにしてゐる。そしてまた會社だの工場では、そんな盲目の方が、仕事に都合が好いからといつて、精々高い俸給を拂つて、この明盲を抱へようとしてゐる。——結構な事さ。

玉蜀黍

米國の國會議員にキヤノンといふ、確かイリノイ州出の愛嬌たつぷりのお爺さんがゐる。爺さんは、性來齒が達者なので、何よりもぎ立ての玉蜀黍を食ふのが一番好きだ。

キヤノン爺さんが、ある時、華盛頓にわざわざ自分を訪れて來た田舎の選舉人を御馳走した事があつた。選舉人は頭の禿げた老人で、自分達の選舉した代議士と差向ひに食卓に就くのが何よりも愉快でたまらなかつた。

キヤノン爺さんは、選舉人に色々珍しい料理を注文して呉れたが、自分は玉蜀黍しか食べなかつた。選舉人は出來立ての牡蠣の油揚を、ロ一杯に頬張りながら訊いた。

「キヤノンさん。先刻から拜見してゐると、貴方は頻りと玉蜀黍を召し上つてゐらつしやるやうですが、お腹に悪ありませんか。」

「いや結構です。」キヤノンは前齒で大粒の玉蜀黍をぼつりぼつり齧りながら言つた。「もう七本も食べましたかな。」

實際食卓の上には、玉蜀黍の殻が七本轉がつてゐた。やつとこさで、牡蠣の油揚を嚙み下した選舉人は、雞の嘴のやうに、食物で汚れた唇を、ナプキンで拭き拭き言つた。

「つかん事をお訊き申すやうですが、キヤノンさん、貴方ここでどのくらゐの食代をお拂ひ

ですね。」

「さやう、一日に六弗でしたかな。」

「それはまた滅法界に高い。」選挙人は椅子を乗出して低聲になつた。「そんなに玉蜀黍ばかり食べてゐて、六弗とは餘り勘定に合はなさ過ぎる。悪い事は言はんからかうなさい。これからは貸馬車屋へ行つて、そこで玉蜀黍を買つて召し上るやうにね……」

流石に農夫の考へだけあつてちよつと面白い。だが、安い玉蜀黍も一度に七本も食つちや馬が怒るかも知れない。

鶉

近頃補助貨がめつきり乏しくなつて、大阪の諸工場では、これに代用させる積りで、支拂證明書といつたやうな、一種の金券を職工に渡して遣り繰つてゐるが、それが紙幣類似證券

取締法に抵触するといつて喧しくなつてゐる。

むかし徳川の三代將軍時分に酒井讃岐守忠勝といふ老中があつた。賄賂を取るときまつたその頃の役人の間で、これはまた打つて變つた潔白者で、他人からの進物といつては何一つ手にしなかつた。

その頃幕府の典藥に始終讃岐守の世話になつてゐる男があつて、お禮の印に何がな贈りたと思つてゐた。

「あの通り慾のない人だから、道樂の方から入つていかなければ。」

色々聞かせてみると、讃岐守には何一つ道樂といふ程のものはなかつたが、唯一つ鶉を飼ふのが好きだといふ事が判つた。

典藥は早速江戸中を探して素晴しく立派な鶉を買ひ込んだ。そしてその次に讃岐守の前へ出た時、何喰はぬ顔をして鶉の話を持ち出した。

「御前、私近頃鶉のためにすつかり弱り切つてゐるのでございます。」

「ほほう、どういふ理由かな。」

讃岐守は好きな鳥の話だけに膝を乗り出して來た。典藥は占めたなと肚のなかで小躍りした。

「親族の者から貰ひ受けましたものの、うるさく鳴き立てますので弱つてしまひます。で、近いうちに料つて食べようかと存じます。」

「なに、料つて食べるて。」讃岐守は眉を擡めた。「鶉の鳴聲は、なかなか風情のあるものぢや。料つて食べる段には雁でもよささうなものぢやないか。ではかう致さう、雁を乃公の方から遣はすから、その鶉と取替へては呉れまいか。」

「さう願はれますれば此の上の仕合せはございませぬ。三日でも飼つてみると、憐れが添はりまして。」

典藥は鶉のやうに背を圓めてお辭儀をした。そしてその次の日、大事な鶉籠を讃岐守の邸に持ち込んで來た。

讃岐守はその鶉の聲を聽いて、初めて吃驚した。

「これは大した掘出し物ぢや。典藥め、物知らずにも程があつたものぢや。」

そして會ふ人毎にその掘出し物を自慢したものだ。すると、誰言ふとなくその鶉は典藥が大金を出して、買ひ込んだものだといふ事が傳はつて來た。

讃岐守はさつと顔色を變へた。そして鳥はそのまま出入の者に呉れてやつて、その後は死ぬるまで鶉を聞かうなどは嘔氣にも出さなかつた。

工場の持主に教へる。補助金が乏しかつたら、その代りに鶉を呉れてやつたらよからうぢやないか。鶉は賣つて錢に替へる事も出来るし、煮て羹にする事も出来る。

幽靈の芝居見

歐洲大戰の時、西部戦線にゐた英軍の塹壕内では、死んだキツチナア元帥が捕虜になつて獨逸にゐるといふ噂が頻りにあつた。前線で俘虜になつた獨逸兵のなかには、伯林の捕虜收容所で怖しく背の高い元帥の後姿を見かけたといふものが少くなかつた。オウクネエ島附近

で溺死した元帥が蘇生つた筈もないが、それでも誰も見た、彼も見たと言ふからには、これもまんざら嘘だとばかりは言はれない。

先年オスカア・ワイルドが巴里の穢い宿屋で窮死した時も、その後二三ヶ月経つてから、あつちこつちで、ワイルドを見かけたといふ人がちよいちよいあつた。

伊勢は寂照寺の畫僧月僊は、乞食月僊と言はれて、幾萬といふ潤筆料を蓄め込んだ坊さんだが、その弟子に谷日月窓といふ男がゐた。沈黙家で石のやうに手堅い生れつきであつた。

その月窓に母親が一人あつた。この母親が或る時芝居へ行くと、隣棧敷に豫て知合の某といふ女が來合はせてゐた。その女は大の芝居好きで、亭主に死別れてからは、俳優の顔ばかり夢に見るといふ風な女であつた。

その日も二人は夢中になつて、芝居や俳優の噂をした。翌日になつて、月窓の母親が挨拶かたがたその女を訪ねてゆくと、鼻の尖つた嫁さんが出て來て不思議さうな顔をした。

「お母さんですか、お母さんは貴女、亡くなりましたから、今日で三月あまりにもなりませんよ。」

「え、お亡くなりですつて。でも、私は昨夜芝居でお目に懸りましたが……」

「まさか。」

と言つて嫁さんは相手にしなかつた。そしてどうかすると、こちらを狂人扱ひにしさうなので、月窓の母親は黙つて歸つたが、途中蹠あしのうちは地に着かなかつた。

京都と偉人

京都の或る學校にYといふ倫理の教師があつた。英國の母親は子供を教育するのに、自分の母親が自分をしつけて呉れた通りにし、米國の母親は、自分が子供の時母親にして貰ひたかつたやうに、我が兒を教育するといふ事だが、倫理の教師といふものは、自分にするのは厭な癖に、他人には何かと難しい事をさせたがるものだ。

Y氏は教壇の上から、居竝んだ生徒を見下した。生徒は蛙の子のやうに、几帳面に膝の上

に手を揃へてゐた。

「どうも京都人は意氣地がなくつていかん。」Y氏は一段と聲を張りあげた。「その證據には京都からは偉い人物といつてはすこしも出て居らん。見なさい、織田信長は尾張の國に生れた。豊臣秀吉は同じ尾張の中村といふ片田舎に生れた。徳川家康は三河の岡崎に生れた。これを宗教家の方面から見ても、傳教大師は近江の人だつた。弘法大師は讃岐の人だつた。法然上人は美作の人だつた。日蓮上人はまた安房の……」

Y氏は京都人の待遇がよくなかつたばかりに、これらの人達が田舎へ逃げ出したかのやうに言つて、京都生れの生徒を責め立てた。生徒達は濟まなかつたやうに、そつと溜息を吐いて、先生の嚴つべらしい顔を見た。

Y氏は石版刷のナポレオンのやうに、腰に拳をあてがつて、ぐつと反身になつて教壇をあちこちした。

「それとも皆さんは、京都から出た人に、もつと偉い方があるのを聞いた事がありますか。」
「あります。」

と、生徒の一人がいきなり衝立つて答へた。

「誰だ、誰だね、早く言つてみなさい。」

Y氏は促き立てるやうに言つた。

「そのお方は、」生徒は體を真直ぐにして姿勢を正した。「唯今先生がお擧げになりました方々の、どなたよりももつと大きく、もつとお偉い……」
「判つた、判つた。後はもう申上げんでもいい。」壇の上の教師は、両手をちやんと揃へて鉛筆のやうに棒立ちになつた。そして泣き出しさうな聲で言つた。「成程、京都からもお偉いお方が……。」

賭博家

堂島の仲買人會我某氏が、いつぞや帝國飛行協會に一萬圓を寄附した事があつた。その縁

故で、ある時、飛行熱心のN陸軍中將が、堂島の仲買業者を集めてちよつとした話をした事があつた。

中將は蟋蟀のやうな長い髭を捻りながら言つた。

「日清、日露兩戰役に於ける我輩の經驗によれば、相場を行つた者は、他の者に比べて、軍人としての成績が一體によかつたやうだ。彼等は平素一か八かの勝負をやりつけてゐるので度胸が据つてゐる……。」

それを聞くと、居合はせた相場師たちは、急に立派な軍人になつたやうな氣で、互ひに顔を見合はせた。そして何處かで素晴らしい手柄でもしたかのやうに思つて、それを考へ出さうとするらしかつたが、どうしても頭に浮んで來なかつた。それもその筈だ。彼等はみんな體格不良で兵役を免除された輩だつたから。

中將は轡蟲のやうに、サアベルをがちやがちやさせた。

「その度胸の据つてるところが、やがてまた諸君をして立派な飛行家とならしめるに相違ない。相場師と飛行家——我輩はいつも此の兩者を結びつけて考へてゐるものである。」

それを聞くと、皆は急にまたいづばし偉い飛行家になつた積りで、宙返りした後のやうにそつと自分の額を撫でてみた。額の中では下澁りな米の相場がこびりついて取れなかつた。皆は中將の言ふやうに、飛行家になるのだつたら、相場で大穴を明けた後でも遅くはあるまいと思つて、くすぐつたさうな顔つきをした。

N中將に教へる。文豪アナトール・フランスの書いた話にかういふのがある。

賭博打が二人船のなかで賭博をしてゐると、急に嵐が起つて船はひっくり返されてしまつた。二人は浪のなかを泳ぎ廻つた末、やつこのことで黒い島のやうなものに縋りついた。それは鯨の背であつた。二人はその背を跨ぐと、いきなり洋袴ズボンの隠しから骰子を掴み出した。そして、

「さあ來た、一勝負やらかさう。」

と言つて、直ぐ賭博を始めたさうだ。

鯨の背を利用する事の出来る賭博打は、飛行機の席シートをも利用する事を知つてゐる筈だ。どちらにも危険が付き纏つてゐるだけに、興味は一段と深からう。

食卓語

米國の石油王ロックフェリアは、滅多に公の宴會へ出ない。たつて招待でもせられると、まるで法廷にでも引き出されるやうに、苦り切つた顔をして入つて来る。

ある人が石油王に對つて、

「何故貴君はそんなに公の宴席をお嫌ひになるのです。」

と訊くと、ロックフェリアは丁度寄附金を出し惜しみするやうに、大儀さうに口を開いた。

「第一私は他人様のやうに餘りたんと食べません。それに他の人達は、食事が濟んでゐてもまだお喋りをするために、じつと食卓についてゐる。私の考へでは、食後のお喋りといふものは、自轉車の車輪のやうなもので、長ければ長いだけ疲勞が大きくなる。」

ロックフェリアの積りでは、疲勞を護謨輪にもじつた言葉の洒落らしいが、實際食後のお

喋りは、どうかすると聴衆をげんなりさせて、お腹の消化まで悪くさせるものだ。

佛蘭西に都を遷してゐた白耳義國王が皇后と連れ立つて、いつだつたか自國の詩人達が組織してゐる文學會に出掛けて行つた事があつた。すると、その挨拶の任に當つたのが、ほかでもない、汽車に轢かれて亡くなつた詩人ヴェルハアレンであつた。

ヴェルハアレンは落着いた態度で立ち上つた。皆は名高い詩人のことだ、どんな素晴らしい挨拶をするだらうかと、固唾を飲んで待ち設けた。

ヴェルハアレンは、靜かに透きとほるやうな聲で、

「白耳義國王陛下並びに皇后陛下……」

と一言言つた。兩陛下は言ふに及ばず、一座の者は、詩人がどんな言葉で後を繼ぐだらうかと、顔中を耳のやうにしてじつと待つてゐた。

十秒経つた。二十秒経つた。一分経ち、二分経つても、ヴェルハアレンは何一つ後を言ひ足さなかつた。見ると、いつの間にか、ちやんと椅子に腰を下してけろりとした顔ですましてゐた。

茶十人

小堀遠州といへば、茶人切つての技巧家だが、實世間の世渡りもまんざらではなかつたと見えて、徳川の二代將軍秀忠にも氣に入つて、茶事といへば吃度相談を受けたものだ。

遠州は茶器の鑑定が巧かつたので、將軍はいつも大金をこの男に委せて、色々の名器を集めさせた。ところが遠州はその金を一萬兩ばかり自分の用に費ひ込んだ。

公儀の預かり金を一萬兩も費ひ込んだとあつては、家は斷絶にきまつてゐるが、遠州ほどの名人をそんな羽目に會はすのも氣の毒だつた。で、井伊掃部頭と酒井左衛門尉とが仲に立つて一萬兩は綺麗に償つて呉れた。茶人にしても、親切な友達は持つた方が都合の善い事が多いものだ。

遠州は二人に何かな禮をしたいと思つた。

で、自分の祕藏のなかから茶器を二つ取出して、親切な二人に贈つた。酒井家が貰つたのは、「飛鳥川」と銘の入つた茶入、井伊家のは宗祇の歌だつた。

「飛鳥川」の茶入は、遠州がまだ若い頃京都で掘出したものだが、その時分には、
「使ふにはまだ新し過ぎるから。」

と言つて、大事に藏ひ込んで置いて、後に堺に來てから取出して見て、
「ほう、ちやうど使ひ頃になつとるわい。」

と、箱書に「昨日と過ぎ今日と暮して飛鳥川流れて早き月日なりけり」と認めて、そのまま使ひならしたものだつた。

茶入にも使ひ頃がある。人間にもそれが無い事はない。とりわけ女を取扱ふには、何よりも先にその骨を覺えなければならぬ。女は茶入と同じやうに、結構な藝術品だからである。

臆病な象

丁内閣が新思想や裸體畫を怖がるやうに、象といふ動物はひどく鼠を恐れる。尤もそれは鼠が風俗を紊すとか、または象に貸金があるからといふためではなく、鼠の恰好が Chacanas といふ小さな動物によく肖てゐるからださうだ。

Chacanas といふのは、どんな生物だかよく知らないが、象が晝寝でもしてゐると、あの長い鼻を傳つてちよろちよろと背に駄けのぼり、錐のやうな鋭い爪でもつて、皮膚に傷をつけ、そこから毒をさして、終ひには象を斃死させるやうな事を仕出かすといふ事だ。

象はこの悪戯者が背に這ひ上つたと気がつくと、鼻を振りまはして、大暴れに暴れ出すが Chacanas はそんな事には少しも驚かない。象が怒れば怒るほど、しつかりと背に齧りついて離れない。そして鋭い爪でもつて、段々ふかく食ひ込んでゆくのだ。

鼠の外貌がこの悪戯者に似てゐるのは、とんだ幸福で、名もないちんちくりんな野鼠までが長い口髭を捻りながら象を脅かす事が出来るのだ。

象はあの大きな圖體でゐて、よくいろんな物を怖がる。むかし徳川の八代將軍の頃、和蘭人が象を連れて來た。誰よりも先に將軍家に御覽に入れなければといふので、象は引張られて常磐橋からお城に入らうとした。

象だの、荷車だのといふものは、よく役人の手抜かりの穴へ落込むもので、その頃常磐橋にも橋板のひどく損じた所があつた。象は危くそこへ片足を踏込んで、横つ倒しに倒れた。そしてニコラス皇帝のやうな悲しさうな顔をして涙ぐんだ。

この大きな獸はやつと助け上げられて、無事に將軍家にお目にかかることが出來た。その折象は役人の手抜かりを直訴しようと思つたらしいが、役人といふものは Chacanas よりももつと長い爪をもつてゐることを思ひ出したので、すつかりあきらめてしまつたらしかつた。

それからといふものは、この獸は橋を見る度に、ひどく物恐れをして、どうかすると尻込

みをしたさうだ。象のため断つておくが、それは橋を怖れたのではない。恐いのは役人の手
拔かりなのである。

伍廷芳の皮肉

支那の伍廷芳が、全權公使として米國に駐つてゐた頃、ある日招待せられて市俄古に行つた事があつた。伍廷芳は尻尾のやうな辮髪を背後に吊下げて出掛ける事を忘れなかつた。

伍廷芳は逢ふ人毎に、とりわけ婦人さへ見れば、支那人に持前の愛嬌を振撒いた。着飾つた婦人連の中には、九官鳥に挨拶されたやうな變な表情をして顔を見合はせたのもあつた。折柄そこへ來合はせたのは、一人の紳士で、伍廷芳とは初めての對面だつた。紳士は無遠慮に言つた。

「伍廷芳さん。近頃お國には貴方がしておいでなの、その辮髪を廢めようといふ運動が起きてるさうぢやありませんか。結構ですね。」と紳士はちよつと辮髪の先に觸つてみた。「それなのに、なんだつて貴方は、こんな馬鹿げた物を下げておいでになるんです。」

「さあ。」と伍廷芳はじろりと相手の顔を見た。紳士は鼻の下にもじやもじやと口髭を伸ばしてゐた。「なんだつて、貴方はそんな馬鹿げた口髭など生やしておいでになりますか。」

「これは御挨拶ですね。」紳士は苦笑した。「これには理由があるんです、私は口もとが悪いもんですから、それで……。」

「さうでせう。さうだらうと思つた。」伍廷芳はにやりともせず疊みかけた。「貴方がおつしやる事から察すると、どうも餘りお口もとが好い方ではないやうだから……。」

懸賞短篇小説

最近米國の或る雜誌社の主催で「短篇小説競技會」といつたやうなものが催された。一體

短篇小説は、どの程度まで文字が切詰められるものかといふ、言はば一種の戯れから思ひ立たれたものだ。

應募原稿は總て三萬餘通、世界の各方面から送つてよこされたもので、なかには佛蘭西の聖壕のなかで書いた物さへあつた。内容には色々な世界が描かれてゐるが、秀れたのは、やはり戀愛と戦争とを書いたものに多かつた。

唯一の規定は、「總語數一千五百以下たるべし」といふ一箇條で、これより長いものは取上げない。原稿料は無論拂つたが、その拂ひ方が随分奇抜で、書かなかつた物にだけ拂ふといふ約束なのだ。

といふのは、應募原稿が規定の千五百語より少かつた場合には、その少い語數だけ一語十仙の割合で原稿料を拂ふのだ。だから、千五百語ばかりで書き上げた人は、どんな立派な短篇小説を書いたつて、鏝一文も貰へない。もしかそれを千四百九十語で書き上げてゐたら一弗だけ貰ふことが出来るし、たつた十語で済ますことが出来たら、百四十九弗貰ふといふ勘定だ。

數多い應募原稿のうちで、一番長いのが千四百九十五語で、その作者は原稿料大枚五千仙を貰つた。一番短いのは七十六語で、その作家は雑誌社から、百四十二弗四十仙を貰つて、にこにこしてゐたさうだ。

もしか、こんなことが日本で出来たなら、多くの不仕合せな女は、自分が持合せてゐる離縁狀を書留郵便で送つたがよからう。たつた三行半で、あれだけ意味の長い物語は、どんな小説家だつて書きやうがない。應募者は少くとも百四十二弗四十仙くらゐは手に握れる勘定だ。それだけあつたら、第二の支度には不足はない筈だ。

高 い 塔

××美術學校で西洋美術史を受持つてゐる人に、Kといふ若い學者がある。そのK氏が學校の生徒に口頭試験をやつた事がある。その時一人の學生の順番になつた。その學生は級の

なかで畫の上手として聞えてゐた男だつた。

K氏は嚴つべらしい口をして訊いた。

「君はバビロンの塔を知つてますか。」

學生はそんな物はてんで頭にも置いてゐないらしく、即座に返事をした。

「知りません。バビロンの塔なんてものは。」

「何かの本に無かつたですか。」

K氏は自分の講義録にあつたのを思ひ出させようとして、わざと「本」といふ語に力を入れて言つた。

「有つたかも知れませんが、覚えてゐません。」

學生はきつぱりと答へた。

K氏は少し狼狽氣味になつた。

「誰かに聞いた事はありますか、學校の講堂か何處かで。」

「ありませんな。」と學生はうるささうに言つた。「先生私は畫家です。バビロンの塔なんか

知らなくても、畫は描けると思ひます。私はまた基督教信者ですが、そんな塔など知らなくても、天國に行けると思ひます。」

K氏は帽子刷毛で鼻先を撫で下されたやうな顔をした。成程考へてみると、自分はバビロンの塔を知つてゐるが、それを知つてゐるからと言つて、畫は巧く描けさうにも思へない。それにとても天國へまで行けさうにも思へなかつた。K氏は試験はこの儘で止めようかとも思つたが、ついでに今一つ訊いてみた。

「だが、まあ考へてみたまへ、バビロンの塔だよ、塔といふからには……」

學生はやつと思ひ出したらしく、急ににこにこして、

「いや解りました。塔といふからには高い建築物でせう。」

「さうだ、さうだ、よく覚えてゐたね。」

二人は寒山と拾得のやうに聲を合せて笑つた。

臍無し男

「箏曲家の鈴木鼓村氏が、ある時、備中の倉敷在にゐる一人の友人を訪ねて行つた事があつた。そこへ行くには、是非村境を流れてゐる高梁川の渡し場を越さねばならなかつた。

渡し場の船頭は、大きな圖體けつてきに闕腋けつてきを着け、冠を被つた鼓村氏の姿を見て、天國から墜ちて來た人でもあるかのやうに、目を見張つて吃驚した。

「貴方はどなた様でござりますな。」

船頭は畏る畏る訊いた。

鼓村氏は剽輕な、その場の間に合せを言ふ事にかけては、立派な藝術を持つてゐる男だ。

誰でもいいから氏に、

「君の腹はまるで粉袋のやうに膨れてゐる。臍なんか無いんだらう。」

と言つて見るがいい。氏は吃度大きな掌で、下つ腹を押へたまま、低聲になつて、

「よく知つてるね。誰にも言つて呉れちや困るが、實際僕の腹には臍が無いんでね……」
と、眞面目になつて言ふのにきまつてゐる。

「貴方はどなた様で……」といふ船頭の言葉を聞いた瞬間、鼓村氏はすつかりそのどなた様になつてしまつた。

「俺かの。俺は京都から來たものぢやが、この村にSといふ男が居るかの。」

鼓村氏は芝居の臺辭がかつた調子で言つた。

「はい、居りますでござります。」

「俺はそのSといふ男に位を授けに下つて來た者ぢや。」

鼓村氏は、自分でももう實際そんなあたりから來た者のやうに思つてゐた。

「粗忽があつてはならんぞ。」

「御苦勞様に存じます。」

船頭は船底に蟲のやうに平べつたくなつてゐた。

鼓村氏は二三日その友人の許で遊んだ。歸途にその渡し場を通ると、やはり同じ船頭が待つてゐて、慌てて頰冠を取った。その瞬間鼓村氏は二三日前の悪戯を思ひ出した。で、嚴つべらしく言つた。

「船頭。位は無事に授けたぞ。この後ともSを大事にしてつかはせ。」

「畏まりましたござります。」

船頭は、おつかなびつくりと鼓村氏を乗せて水を渡つた。鼓村氏は舷から蛙のやうな恰好をしてびよいと向う岸に飛んだ。

お蔭で氏は渡し錢を拂ふ面倒を免れた。船頭も無論そんな事は思つてゐなかつた。のみならず、友達のS氏にまで、その後二三月といふものは、どうしても渡し錢を貰はうとしなかつた。

襟飾

マアク・トエンといへば、米國の名高い滑稽作家だが、この小説家が女流作家のストウ夫人と隣合せに住んでゐた事があつた。

マアク・トエンは閑さへあれば、ストウ夫人の許へ出掛けて行つて、夫人と娘さんとを相手に喋りに耽つたものだが、一向無頓着な男だけに、どうかすると、寢衣のまま飛び出したりするので、その都度細君の不機嫌を買つたものだ。

「あなた、その身装みなりはなんですね、シャツが綻びてゐるぢやありませんか。」
すると、この小説家は小娘のやうに顔を赧からめながら、

「や、とんでもないこつちや、俺はなんだつてこんなに粗忽そつつかしや者なんだらう。」
と、ひどく悄氣かへつたものださうだ。

ある朝も、トエンは例のやうにストウ夫人を訪ねてお喋りをした。そして上機嫌になつて口笛を吹き吹き歸つて來た。すると入口に細君が衝立つてゐて、亭主の姿を見るなり、鷺鳥のやうに我鳴り立てた。

「あなた、そんな身装をしてお隣へ行つてらしたんですか。襟飾もつけないで。なんてまあ禮儀を知らない方なんでせう。」

小説家はちよつと立ち停つて、情ない顔をしたが、そのまま一言も言はないで書齋に入つて行つた。そして二三分すると、女中を呼んで小さな箱を隣のストウ夫人の許まで持たせてやつた。

夫人は不思議さうに箱を開けてみた。なかには黒い襟飾に手紙が一本添へてあつた。

「これが私の襟飾です。どうぞ手に取つて御覽下さい。私は今朝三十分ばかりお邪魔をしたと思ひますから、三十分ほど御覽になつたら、直ぐ御返しを願ひます。實は襟飾といつてはこれ一つなんですから。」

ストウ夫人は命令どほり三十分ほど襟飾を見てゐた。その間に煮物が焦げついたかどうか

は、私の知つた事ではない。

缺

皿

日本の遣英赤十字班が英國へ渡つた時、自惚の強い英吉利人は、

「日本にも醫者が居るのかさ。」

といつたやうに、ひどく珍しがるやうだつたが、決して歓迎はしなかつた。

一行の食事は一人前一ヶ月百圓以上も支拂つたが、料理はお粗末な物づくめであつた。あつた時など、わざと縁の缺けた皿に肉を盛つて、卓子に竝べてあつた事があつた。それを見た皆の者は、^{むき}脛になつて腹を立てたが、あいにく腹を立てた時の英語は、かいくれ習つてゐなかつたので、何と切り出したものか判らなかつた。

一行の通辯役に聖學院のO氏がゐた。氏は英語學者だけに、腹の減つた時の英語と同じや

うに、腹の立つた時の英語をも知つてゐた。氏は給仕長を呼んだ。給仕長は鷺鳥のやうに氣取つて入つて來た。

「この皿を見なさい。こんなに毀れてゐるよ。」O氏は皿を取上げて質造銀貨のやうに給仕長の目の前につきつけた。「日本ではお客に對して、こんな毀れた皿は使はない事になつてゐる。で、餘り珍しいから、記念のため日本へ持つて歸りたいと思つてゐる。幾らで譲つて呉れるね。」

給仕長は棒立ちになつたまま目を白黒させてゐた。O氏は疊みかけて言つた。

「幾らで譲つて呉れるね、この皿を。」

給仕長はこの時やつと持前の愛嬌を取返した。そして二三度頭を搔いてお辭儀をした。

「この皿はお譲り出来ません。日本のお客様の前へ出た名譽の皿ですもの。」

と言つて、引つたくるやうに皿を受取つた。そしてそれ以後は、縁の缺けない、立派な皿を吟味して、二度ともう以前のやうなのは出さなくなつた。

リンカンの冗談

リンカンといへば、亞米利加中の人間の苦勞と悲しみとを、自分一人で背負ひでもしてゐるやうな、氣難しい、悲しさうな顔をしてゐたが、時々軽い冗談口をきく程の心の餘裕を持つてゐた。

將軍キルソンが、ある時、コネチカットの議員をしてゐる自分の義弟某と、リンカン大統領を訪ねた事があつた。キルソンの義弟といふのは、身の丈七尺もあらうといふ背高男で、道を歩く時には、お天道様が頭につかへるやうに、心もち背を屈めてゐた。

リンカンは應接室に入つて來たが、室の中央に突立つてゐる背高男が目につくと、挨拶をする事をも忘れて、材木でも見るやうに靴の爪先から頭に掛けて、幾度か見上げ見下ししてゐた。材木は大統領の頭の上で馬のやうににやにや笑つた。

「大統領閣下、お初にお目に懸ります。」

「や、お初めて。」とリンカンは初めて気がついたやうに會釋した。「早速で甚だ無躰なやうだが、ちよつとお訊ねしたいと思つて……」

背高男の議員は、不思議さうな顔して、背を屈めた。

「何なりとも、閣下。」

大統領はにやりとした。

「貴方は随分お背が高いやうだが、どうです、爪先が冷えるのが感じられますか。」

「へへ……御冗談を。」

議員は頭を搔いて恐縮した。

髭の有無

詩人T氏が、同志社女學校で比較文學の講義をしてゐた頃、講話のついでから話題が「文學者と髭」といふ事に及んで來た。

T氏は詩人藝術家のすべて傑出してゐる人達には、きまつたやうに髭が無いといふ事を説き出した。氏はその例として、ダンテ、ゲーテ、シルレル、ミルトン、シエリイ、キイツ、芭蕉、馬琴、巢林子……などといふ名家を引張り出して來た。

談話に聴きとれてゐる女學生は、かういふ詩人の肖像を頭のなかで描き出して見た。大抵安雜誌の口繪で見覚えてゐるので、誰も彼もが天然痘を患つたやうな顔をしてゐたが、實際髭の無い事だけは確かであつた。

女學生は詩人や藝術家のなかから、髭の無い例を探り出すのが面白くなつて、てんでに自分達の記憶から色々な人達の口もとを思ひ浮べてみた。

「紫式部、清少納言、デョオヂ・エリオット、クリスチナ・ロセツチ……成程ほんとやわ、みんな髭があらへん。」

若い娘達は感心したやうにT氏の顔を見た。成程この人にも髭といつては一本も生えてゐ

なかつた。

女學生の眼は言ひ合はしたやうに、T氏の立つてゐる講壇の後方にそそがれた。そこには寫真版のロングフェロオの肖像がかかつてゐる。それを見ると、皆は一度に聲を揚げて笑ひ出した。

T氏は何氣なく後方を振向いてみると、ロングフェロオが悪性の風邪でも引込んだやうに顎鬚をもぢやもぢや生やしたまま、苦り切つてゐるのが目についた。氏は一流のこき下すやうな調子で、

「うん。この男が一人鬚を生やしてる。だが、これなぞ小詩人の事だから、まるで問題になりませんよ。」

この談話を聞いた女學生は、今ではそれぞれ巢立ちをして、人の細君になつてゐるが、誰一人詩人や藝術家には嫁いではゐないらしいから、鬚の有無は餘り問題にはしてゐない。實際鬚などはどうでもいい。問題は尻尾の有無である。女の嫁ぎたがる男には、狐のやうによく尻尾を引摺つてゐるのがある。

三十一文字

Mといふ心理學者が、大學の教室で心理學の講義をしてゐた時、何かの例證を和歌から引いた事があつた。(和歌といふものは、手際よく、例をひくと、早天に雨を降らす事も借金の日限を延ばす事も出来るものなのだ。)

心理學者はフロツクコートの隠しから、皺くちやな手巾を取出して、ちよつと水涕みづはなをおし拭つた。そして例の几帳面な調子で、

「一體和歌といふものは、諸君も御存じかも知らんが、三十一文字みそひともじといつて、ちやんと三十一字から成立つてゐる。ここに一つ例をあげると……」

心理學者はちよつと言葉を切つて、記憶から手頃な歌を一つ探り出さうとした。

甜瓜の恰好をした學者の頭のなかには、歌といつては「百人一首」の中にあるのが二つ三

つ轉がつてゐるに過ぎなかつた。學者は顚顚を拇指で押へたままじつと考へ込んでゐると、都合よく道眞公の歌がひよつくりと滑り出して來た。

「ここに一つ例をあげると……」と心理學者は繰返して、「名高い百人一首にある歌だが、丁度三十一文字で出來てゐる。」と、叮嚀に節高な指を折つて數へ出した。

「菅家、このたびは幣もとりあへず手向山……」

歌を下の句まで讀んでしまふと、忠實な學者の指は、三十五文字を數へてゐた。それに何の不思議があらう、歌は第二句目で一字延びてゐる上に、心理學者は「菅家」といふ名前までも數み込んでゐたのだから。

學者は數へた片手を宙に浮けたまま、世間が厭になつたやうな顔をして棒立ちになつてゐたが、暫くすると、ぐつと唾を飲み込んだ。

「ああ、これは字餘りでした。和歌にはちよいちよい字餘りといつて、普通のより文字が延びてゐるのがあります。丁度猿の尻尾の長いのあるやうなもので……」

高芙蓉が或る時、弟子を集めて蒙求の講釋をしてゐた。「車胤集螢」の章になると、高芙蓉

は肝腎の車胤の事などは忘れたやうに、これまで自分が見て來た方々の螢の話をし出した。そして最後に宇治の螢を引張り出して「あそこの螢は大きいね。さやうさ、雀よりもつと大きかつたかな。なにしろ源三位頼政の亡魂だといふんだからな。」と吹いてゐたさうだ。笑つてはいけない。先生といふものは、大抵こんなことを教へるやうに出來てゐるものなのだ。

道 樂

郵便切手を集める——と言ふと、なんだか子供染みた事のやうに思ふものがあるかも知れないが、なかなかどうして、切手の蒐集は、文展の審査や、煙草の專賣などと同じやうに、立派な堂々たる事業で、その證據には英國のジョージ皇帝が、大の切手道樂であることを擧げたい。凡そ地球の上で發行せられた切手といふ切手は、残りなく皇帝の手許に集まつてゐ

る。皇帝がその海軍と共に、郵便切手の蒐集を誇られたところで、誰一人異議を言ふものはなからうと思はれる程だ。

ジョージ皇帝には今一つ道楽がある。それはタイプライタアを叩く事で、この道にかけての皇帝の手際は、倫敦で名うてのタイプストに比べても、決して負は取らない。

だが、タイプストとしての皇帝には、唯一人恐るべき敵手がある。それは米國のウイルソン大統領で、ウイルソン氏がタイプストとしての手際は、大統領としての手腕よりも、學者としての見識よりも、際立つて優れてゐる。

ウイルソン氏は閑さへあると、タイプライタアに向つてこつこつ指を動かしてゐる。ある忙しい會社の重役は、ひどく氏の手際に惚れ込んで、

「タイプストとしてうちの會社に来て呉れたら、七百弗までは出してもいい。」と言つたさうだ。してみると、氏が若い寡婦さんを後妻に貰つたのは、經濟の立場から考へて見ても、まんざら間違つた事ではなかつた。

伶俐巧者

先日藤田家の茶會に、故人香雪軒の遺愛品として陳列せられてゐた漢田村文琳の茶入について面白い話がある。

あれは以前某の賣立會で、實業家M氏の手に入りかかつたのを、横つちよから飛び出した藤田傳三郎氏が、一目見るなり欲しくてたまらず、

「たつての頼みだ、是非譲つて欲しい。」と、きつい所望に、M氏も止むを得ず譲る事にしたものだ。

M氏の肚では、藤田がそんなに欲しがつた茶入だ、代りには吃度氣のきいた幅でもよこすのだらう、もしか金だつたら、一つ思ひ切つてしやれた茶會でも開いてやらうと、心待ちにしてゐると、そこへ届いたのは藤田氏からの一封で、あけて見ると、M氏自身が心積りの幾

倍かの小切手が包んであつた。

それだけ有つたら、しやれた茶會の六七度は出来る筈だつたが、M氏は茶會の代りに一度にやつと笑つて、それで済ましてしまつた。そしてこんな場合、笑つて済ます事の出来る自分は、なんといふ伶俐者だらうとつくづく感心をした。

さういふ履歷附の文琳の茶入が陳列されるといふので、その日一日の茶會には、東京から名高い五人組の茶入がやつて來た。五人組といふのは、澤山なお金と、少しばかりの趣味とを持合せてゐる五人の實業家である。

五人はその茶入の前に来ると、一齊に眼を光らせた。成程結構な茶入だ、滅多に獲られない名器だと思ふと、五人の頭には言ひ合はせたやうにM氏の事が浮んで來た。

「Mは何處にゐるだらう、惜しい物を手離したもんだな。」

「たしか大連に旅行してゐる筈だ、電報を打たうか。」

「よからう。皆で一緒に笑つてやれ。」

といふので、その場で直ぐに電報が打たれた。

大連の旅館で、M氏は五人名前の電報を受取つた。

「タムラブリンミタ バカヤロウダナ」

幾度讀み返してみても同じ事なので、M氏はお婆さんのやうな顔を歪めて、にやつと笑つた。そしてこんな場合にも、笑つて済ます事の出来る自分は、なんといふ伶俐者だらうとつくづくまた感心をした。

三人畫家

先年YとBとTといふ日本畫家が、三人連れ立つて支那觀光に出掛ける途すがら、神戸へ立ち寄ると、土地の富豪連が一夕三人を招待した。

一體富豪が他人を招待するのは、何か見せつけたいとか、何か頼みたいとかいふ時に限る事で、もしかお客が一向物に感心しなかつたり、何一つ持合せの無い男だつたら、富豪とい

ふものは、二度ともうそんな人を招待しようとはしないものだ。

神戸の富豪も、ちやんとさういふ型に嵌つてゐたから、宴會半ばになると、そろそろ畫絹を取出して、三人の畫家の前に擴げ出した。

「何かちよつとしたもので結構です、後の記念にもなる事ですから。」

それを見たYは、急に喰べ酔つたやうな顔をし出した。蹣跚と立ち上つて、

「何か一つやつつけませうかな。」

と、だらしなく畫絹の前に坐ると、變な手つきで馬鈴薯のやうなものをさつと塗りくつた。

そしてとろんこの眼でじつと見てゐたが、「こいつあ、いかん。」と言つて、さつと畫絹を放り出した。

で、今度はまた新しい畫絹の上に、おたまじやくし 蝌蚪のやうなものを描きかけたが、「駄目だ駄目だ。」と呟いて、それをもそこへおつ放り出してしまつた。

すると、最前からそれを見てゐた富豪連は、いつの間にかてんでにそつと畫絹を抱へ込んで遁げ出した。そして言ひ合はせたやうにBの前に集まつて來た。

「Bさんはいつ見てもお若いすな。——どうぞおついでにちよつと……」

Bは山のやうな畫絹の前に、汗みづくになつて、瀧を描き、山を描き、鶴を描き、龜を描き、女學生のやうな觀音様を描き、神戸市長のやうな馬を描きしてゐるうちに、たうとう眩ひがして、自分にも判らぬやうな變な物を描き出した。

「巧いぞ……」

だしぬけにうしろで大きな聲で喚く者があるので、皆が吃驚して振りかへると、兩手を懷中にYが欠伸をしいしい衝立つてゐた。

なに、Tだけが居ないつて。——そんなはずはない。すばしこい伶俐者のTは、畫絹が取出されたのを見ると、いつの間にか物置にすべり込んで、そのままそこで居睡りをしてゐただ。

新聞記者となる法

むかしベンヂヤミン・フランクリンが新聞事業を起さうとした時、それを聞いた友達は、強ひてとめだてをした。

「それは君、止した方がよからうぜ、吃度失敗するに決つてるからね。何故といつて、讀者の地盤はもうすっかり開拓されちまつて、君の新聞がはいり餘地が残つてゐないぢやないか。」
「成程、それもさうだがね、まあ思ひ立つた事だからやつてみるさ。」

フランクリンもいくらか無理とは思ひながら、新聞を出すには出した。ところで、その頃新聞といふものが幾つあつたかといふと、廣い亞米利加を通じて、たつた二種あつただけだつた。

今の京都大學教授K氏が、初めて新聞記者生活に入らうとした時、その先輩にあたる大内

青巒氏は、何か言つて聞かさなければならぬ羽目になつた。すべて先輩といふものは、後進が世間へ乗り出さうとする時には、えて何か言ひ聞かせたがるもので、そんな時自分にも實行出來兼ねる事を、尤もらしく言ひ聞かせる者ほどが、先輩らしい先輩といふことになつてゐる。もしか、恰好な言葉が思ひ出せなかつたら、そんな折には論語でもあけて見るがよい。論語は人に言つて聞かせるのに、都合の好い事がたと載つてゐる本である。

大内氏は論語とお経とがごつちやに入つてゐる頭を撫でた。

「すべて新聞記者となる者に、心得ておかなければならぬ事が三つある。第一は借金をせぬ事。第二は喧嘩をせぬ事。第三は最後まで専門を出さぬ事。この三つが巧く守られたら、吃度成功疑ひなしぢや。」

K氏はこの三箇條を守袋に入れた積りで記者生活に入つて行つた。そして幾年か経つて氣がついてみると、自分はいつの間にか記者生活を止めて學者として大學教授になつてゐた。「喧嘩は滅多にしなかつたが、最後まで出してはならぬはずの専門で飯を食ふやうにはなるし、おまけに今だに借金はたと残つてゐるし……」

K氏は如何にも先輩にすまないかのやうに、かう言つて呷いてゐるが、それでも大學の卒業生のなかで、新しく記者生活に入らうといふものがあると、
「第一は借金をせぬ事。第二は喧嘩をせぬ事、第三は最後まで専門を出さぬ事。この三つが巧く守られたら、吃度成功疑ひなしぢや。」
と、今だに言ひ言ひしてゐる。

肥 大 婦

亞米利加の或る田舎に、居酒屋があつた。その女將は娘のうちから出嫌ひの上に、店の仕事で忙しづくめなので、十年ばかりといふもの、滅多に戸口から外へ出なかつた。

さうかうするうち女將は多くの居酒屋の亭主にあるやうに、でぶでぶと肥り出した。脂ぎつた顔が河馬のやうにだらしなくなりかけると現金なもので、客足は次第に遠退いて來た。

さうすると、手もとが不如意になりがちなので、女將は租税を納めるのを怠つた。一體租税とか、女房から頼まれた手紙とかいふものは、よく忘れがちなものだが、暫くすると、土地の收税吏は怖い顔をして催促に出掛けて來た。

收税吏は瘦せた男だつた。瘦せてゐるだけに、女將の脂ぎつた顔を見るとつい胸が悪くなつて、悪口の一つも投げつけるやうな事になつた。すると、女將はいきなり大きな掌でもつて、收税吏の横つ腹を押へて、ぐつと締めつけた。ひよわな役人の腹は薄荷酒ペパミンの空壇のやうな恰好になつた。

收税吏は女將の手もとを潜りぬけて、表へ轉がり出したかと思ふと、直ぐ巡查を連れて戻つて來た。暴行犯として女將を拘引しようといふのだ。

巡查は女將の手首を捉へて、戸外へ引張り出さうとするのだが、肥つた女の體軀が入口に一杯になつて、どうにも始末におへない。強ひて拘引しようとするれば、入口を毀さなければならぬ。巡查にそんな力は與へられてゐないので、二人はぶつぶつ言ひながら引揚げるほかはなかつた。

皮肉な子供

セオドル・ルウズヴェルトの前に米國にマツキンレイといふ大統領があつたのは、まだ記憶してゐる人が多からう。この人は政治のほかに一つ道樂を持つてゐた。道樂といふのは、閑がある、國務省の大官とか、自分の友達とかを連れて華盛頓の市街を散歩する事だ。散歩といふものは、病後上りや、ひよわな人に良ければかりでなく、とりわけ一國の大統領や大臣には一等効力があるものだ。一體政治家などといふ輩は、自分が政治を執つてゐるうちが、この世の黄金時代で、狗ころまでが自分を見ると、道をよけてお辭儀をするでも思つてゐるらしいが、實際市街を散歩してみると、その狗ころばかりか、人間までもが自分を見ると、吠えつかうとしてゐるのを知る事が出来る。

マツキンレイは或る日の午過ぎ、例のやうに友達と散歩に出掛けた。ちやうど秋の半頃で

空は女のやうに碧い眼をして笑つてゐた。市街を通る人は皆上機嫌で、自分の事を思ふのに忙しい風であつた。マツキンレイはこんな結構な日は、國祖ワシントンの政治中にも滅多になかつたらうと思つた。

ふと見ると、日射のいい道の片側に、子供が五六人がやがや遊んでゐた。そのなかに七歳ばかりの男の兒があつた。一人仲間を離れて、並木の陰で小さな車に跨がつてゐた。大統領はそれを見ると、ちよつと悪戯がしてみたくなつた。

悪戯といふものは、人間のする事業のなかでは最も高尚なもの一つで、天才でなければ出来ない藝當である。マツキンレイは背後から子供の被つてゐる帽子の鏢をぐつと押へた。そして肩越しに大きな顔をにこにこさせて覗き込んだ。大統領のつもりでは、かうすれば、子供が吃度笑顔をかへして呉れるだらうと思つてゐたのだ。

ところが子供は皮肉な小童こわっぱだと見えて、にこりもしなかつた。そして落着いた聲で、「小父ちゃん、もうそれでする事おしまひなの。」

と言つた。お蔭でマツキンレイは冷水を浴びせかけられたやうに立ち竦んでしまつた。

飛青磁

富豪A家の第二回入札に、二千三百八十九圓といふ値で骨董店春海に引取られた飛青磁の香爐がある。値段から言ふと、たいしたものではないが、ある意味で數寄者仲間の好奇心を牽いてゐたのは、この香爐であつた。

この飛青磁は、もと大阪の平瀬家に傳はつて、同家名物の一つとして聞えてゐたものだ。この香爐が名物になつたのには、二つの譯があつた。その一つはこれに木瓜の青貝螺鈿の卓が附いてゐた事で、もう一つはこれが贗物であるといふ事であつた。

平瀬家入札に先代Aの主人は、この香爐と卓とを七千圓で購ひ取つた。出入の骨董屋の値ぶみで卓が千圓、香爐が六千圓といふ積りであつた。

A家の主人がこの香爐を引取つたといふことは、その頃の數寄者仲間で大分噂の種になつた。Aめ、たうとうあの贗物を抱き込んだて。お互ひに一ぱしの鑑定家となるには、みんな高い税を拂つたものさ。」

かう言つて、皆は鑑定家らしい顔を見合はせて笑つたものだ。だが、考へて見ると、笑つて済ますには餘りに惜しかつた。

「なんでも一つ恥をかかせてやらなくつちや。物持なんて輩は、恥でもかかないと賢くなりようがないんだから。」

皆はA家の主人に恥をかかせる事にきめた。實際人間は人前で恥をかくとか、異性に見捨てられるとかすると、一度に賢くなるもので、この段になると、書物などはほんの閑潰しの道具に過ぎなく。

皆は銀の金槌を拵へて、A家に贈つた。茶會でも開いて、皆の居合はす前で、例の香爐を叩き割れといふ謎なのだ。A家の主人は金槌だけは黙つて懷中にしまひ込んだが、一向茶會を開かうとはしなかつた。

で、今度の賣立で、木瓜の卓は六千圓といふ値にせり上げられたが、無事に生き残つた飛青磁は大分見倒されて、二千三百八十九圓といふ事になつた。

だが、氣に懸るのは銀の金槌で、今度の賣立にも、あの金槌だけは出てゐないところを見ると、どうかしたのではあるまいかと心配してゐる向きもある。いや、心配するがものはない。銀の金槌は今だにA家に残つて、そこらの釘の頭を叩いてゐる。釘といふものは、出來星の紳士と同じやうに、根縮が弛むと、直ぐ頭を持ちあげたがるものなので、時々金槌で叩いておく必要がある。

明恵と解脫

むかし笠置の解脫上人が、梅尾の明恵上人を訪ねた事があつた。その折明恵は質素な緇衣の下に、婦人の着けさうな、緋の勝つた派手な下着をつけてゐるので、解脫はそれが氣にな

つて堪らなかつた。出家の身分で、とりわけ上人とも呼ばれる境涯でありながら、こんな下着をつけてゐるとは、實際どうかしてゐるなと思つた。で、話の途切れに、

「つかない事を伺ふやうぢやが、ついぞ見馴れない立派な下着をつけてゐられますな。」
と、いくらか皮肉の積りで言つてみた。すると、明恵は言はれて初めて氣がついたやうに、「これでござるかな。」とちよつと自分の襟を扱いて見せた。「これは豫て私に歸依してゐる或る町家の一人娘が亡くなつたので、その親達から何かの代にと言つて寄進して參つたから娘の菩提のためと思つて、ちよつと身につけてゐるやうな仕儀で——えらい所へお目がとまりましたな。」

と言つて、つつましかにちよつと笑つてみせた。

解脫上人はそれを聞いて、

「要らぬ所へ目がついたな。ほんのちよつとの間でも、そんな所へ心を遣つたかと思へば、明恵の思はくも恥づかしい。」
と、顔から火が出るやうな思ひをしたさうだ。

穿き違ひ

政友會の三土忠造氏が、會の本部で退屈凌ぎにズデルマンの『マグダ』を読んでゐた事があつた。『マグダ』は言ふ迄もなく、松井須磨子の出世狂言として名高い劇である。三土氏は拾ひ読みをしながら、七面鳥のやうに顔を擧めたり、笑つたりしてゐた。

そこへ眞白な頭髮に、きれいに櫛の目を見せた長身の男がぬつと入つて来て、うしろからじつと書物を覗き込んでゐたが、しばらくすると、三土氏の肩越しに長い手を出して、書物の表紙をめくつた。三土氏はおどろいて後を振り向いて見た。そこには總裁の原敬氏が衝立つてゐた。

「マグダと言ふんだな。何處かの政治家の傳記かね。」

原氏は獨言のやうに言つて、のつそりとまた室を出て行つた。

入れ違ひに床次竹二郎氏がその室に入つて来た。そして同じやうに三土氏の肩越しに、この名高い獨逸の脚本を覗き込んでゐたが、暫くすると、
「マグダだね。政治家もこんな書物まで讀まなくつちやなくなつたかな。」
と、半分は三土氏を冷かすやうに、半分はついぞそんな本を讀んだ事のない自分を非難すやうに言つた。

これと似よつた話はDといふ名高い基督教の老牧師にもある。ある日の夕方、牧師は麵麩と味噌汁と林檎とで一杯になつた腹を抱へて、明日の日曜日の説教を考へ込んでゐたが、ふと襖越しに子息の聲を聞きつけると、聲を立てて喚んだ。

「おいおい、お前にちよつと訊きたい事があるから、來てお呉れ。」

子息さんは新聞記者である。牧師の子息が新聞記者になつて悪いといふ法はない。牧師の子息は、ただ牧師にはならない方が善いだけの事である。子息さんは入つて來た。

「お呼びですか。」

「ちよつとお前に訊きたいんだが……近頃荒尾讓介君はどうしてるか、知らないかね。」

息子さんは眼を白黒させた。荒尾讓介は言ふ迄もなく、小説『金色夜叉』に出て来る老壯士である。で、いい加減な返事でごまかす事にした。

「相變らず貧乏で困つてるやうですな。」

「さうか、氣の毒なもんぢやな。」

老牧師は實際氣の毒でたまらないやうに言つた。そして讓介氏が、自分と近づきでないのは、あの男にとつて一生の損であるやうな顔をした。

國旗に接吻

桑港には露西亞生れの労働者がたんとゐる。そのなかの一人が、ある日仕事先で手を泥だらけにした事があつた。一體手といふものは、よく汚れるもので、マコウレエの言葉によると、英吉利の或る鍛冶屋は、泥坊に頼まれて、金物の脏品を火に溶かす折には、手で觸つて

は汚れるからといつて、わざわざ長火箸を使つたといふ事だ。結構な考へだ。

その露西亞人は、汚れた手先を綺麗に水で洗つたが、さて濡手を拭かうにも手巾一つ持合せなかつたので、両手をぶら下げたまま、きよろきよろそこらを見まはしてゐた。ふと氣がつくと、何かの旗目だと見えて、頭の上に米國の國旗が一つ動いてゐた。

露西亞人は両手を伸ばして國旗の片隅を押へたかと思ふと、器用にさつと手先を拭いた。

そして何喰はぬ顔で仕事場に歸らうとすると、後から、

「もしもし。」

と呼ぶ者がある。露西亞人は拭いたばかりの両手をズボンの隠しに突込んで、うしろを振向いた。そこには七面鳥のやうに、ぱつと裾を広げたアメリカ女が立つてゐた。

「もしもし。今見てゐると、お前さんはこの國旗の布地で濡手を拭きなすつたやうだね。」

女はきいきいした聲で突つかかつて來た。露西亞の労働者は呻くやうに言つた。

「拭いただよ。それがどうしただ。」

「お前さん、これを何と思つてるの。」

「國旗だと思つとるだよ。」

「國旗を何と思つてるの。」

「ただの布地だと思つとるだよ。」

露西亞人はトルストイのやうな毛むくぢやらの顔を、平氣でにやにやさせてゐた。

「まあ、なんといふ没分曉漢なんだらうね。」女は七面鳥のやうに顔色を變へて、我鳴り立てた。「私達の兄弟は、今ではこの國旗のために戦つてゐるのぢやありませんか。それも原因はと訊せば、お前さんの國が火元なんぢやありませんか。それに、それに……」

女は息が詰つたやうに苦しがつてゐたが、そのまま駈け出して行つて巡査を呼んで來た。

巡査は件の露西亞人を警察署に連れ込んだ。暫くすると、さつき手を拭いたばかりの米國國旗が、その前に持ち出された。巡査は嚴つべらしく言ひ渡した。

「この國旗へ接吻しなさい。」

労働者は獸のやうな悲しさうな眼つきをして、毛むくぢやらの口で國旗に接吻した。

「それでよし、今度は此方へ來た。」

巡査は労働者をそのまま薄暗い留置所のなかに放り込んで、がちやりと重い錠前の音をさせた。

吸ひ殻

青樓へ遊びにゆく客といふものは、大抵見え坊で、内證はびいびいでも、懐中には山を購ひ、邸を購ひ、馬を購ひ、郵便切手を購ひ、お刺で若い妓の微笑を購ふくらゐの財貨は、いつも持合せてゐるらしい顔つきをしてゐるものだ。

青樓の煙草盆には、たつた一口か二口か喫つたばかりの巻煙草が、無造作に灰のなかに突きさされてゐるのが多い。一寸見は贅澤なやうだが、精々二十錢やそこいらの金で、若い妓の前に男の虚榮心を満足さす事が出来るなら、こんな廉い贅澤はない筈だ。

大阪の南地に相應な青樓が一軒ある。その主人はしよつちゆう鹽原多助の講談を愛讀し

てゐて、自分も多助のやうに道に落ちた草履でも拾つてみたと思つたが、草履には土がへばり着いてゐるので、少しむさくるしかつた。で、お座敷から下りて来る煙草盆の中から、お客が喫ひさしの巻煙草を一つ一つ拾ひ上げる事にした。尤もそれを拾ふには、仲居といふ良い役があつた。自分はただ懐手をして見てゐればいいので、こんな結構な多助はないと、主人は思つた。

主人は月の二十一日には、きまつたやうにお大師参りをする。お大師参りの途中には、薄穢い物貰ひがゐて、蝦蟇のやうに土の上にかいつくばつてゐた。青樓の主人は、それを見る度に何がな施してやりたいとは思つてゐたが、どうしても恰好な物が思ひ當らなかつた。お鳥目といふものもあつたが、主人の考へでは、あれは他から貰ふもので、他に呉れてやるものではなかつた。——ところが、ふと思ひついたのは件の巻煙草で、主人はせつせと拾ひ溜めた。そして途で物貰ひを見掛けると、その中から、五六本づつ取出しては恵んでやつた。「お菰め、あない喜んでら。」青樓の主人は嬉しさうな物貰ひの顔を見て、心底から満足した。「我ながら善い事を思ひついたもんだて。お大師さんかて、こないに發明やなかつたか

も知れへんな。」

さうかうするうちに、物の値段は青樓の主人には相談なしに騰つて來た。十錢の煙草は十二錢になつた。遊びに來る客は相變らず山を購ひ、邸を購ひ、馬を購ひ、郵便切手を購ひ、お刺で若い妓の微笑が購へさうな顔をしてゐるが、喫ひさしの煙草は段々短くなつて來た。

青樓の主人は煙草盆を覗き込みながら情なささうに呟いた。

「しみつたれやな、今どきの人。こんなやとお菰に施しも出來へんがな。」

それから一月経つた。二月経つた。三月四月経つた。煙草盆のなかの喫ひさしは段々また長くなつた。すると、一たん悄氣かへつた青樓の主人の顔は、また晴々しくなつて來た。さうして月の二十一日が來ると、朝早く家を出て、途々乞食を見ると、袂から例のを撮み出して、まるで慈悲深い王様でもあるやうに施しをしてゐる。

國務卿祕藏の聖書

獨逸の媾和提議に對する米國國務卿ランシング氏の演説を読んだものは、その一節に、「しかも慈悲なき嚴酷の正義は非基督教なると共に、正義を破壊する如き慈悲も、亦等しく非基督教なる事を忘るべからず。」といつたやうな、坊さん臭い文句があつたのを記憶してゐるだらう。

ランシングの演説を読んでみると、いつの場合でも聖書の文句が引合に出されてゐる。それもその筈で、氏は世界に一つあつて、二つとはまた見られない珍しい聖書の持主である。これは極く内々の話だが、實はその聖書は氏の夫人が結婚の當時贈り物にしたものである。一體女といふものは、結婚と同時に、男に色々の贈り物をする。傷だらけの心臓、履歴つきの殺し文句——さういふなかでは、聖書は比較的平凡な進物である。

夫人が贈り物の聖書は、餘白のたんとある大型の本だったので、ランシング氏はそれへ註釋、引證を細かく書き込んだばかりか、挿繪や地圖のやうなものさへ一々克明に書入れをしてゐる。地圖も、挿繪も、引證も、註釋も、まるで印刷のやうなきちんとした文字で、誰の目にもそれが手で書いたものだとは思はれない。それもその筈で、國務卿は若い頃建築學をやつた事があるので、製圖用のペン先を使ふ事にかけて、人一倍巧者なのである。書入れの参考用の地圖や寺院の建築圖は、少しの手入れなしに、そのまま製版に廻す事が出来るほど上手に出来上つてゐるといふ事だ。

かういふランシング氏は、今では米國でも指折りの聖書學者に數へられてゐるが、この素晴らしい聖書の知識は、實を言ふと、氏が長い間毎日半時間づつを聖書の研究に當てた、その零碎な調べの積り積つたものださうだ。食後の半時間——この半時間の研究は、米國の國務卿を名だたる聖書學者にしてくれた。食後の半時間——この半時間の無駄話は、そんじよそこの日本の紳士を豕のやうな馬鹿者にしてくれた。なんといふ有難い事だ。

文豪の顰つ面

トルストイが或る時X要塞の門にひよつこりとその姿を現した。——自分が前以てこんな事を知つてゐたら、何を措いても日本の人道主義者達にこつそり耳打ちをするのだが、實を言ふと、これを聞いたのは、トルストイが亡くなつてからずつと後の事だから、どうか勘辨をして貰ひたい。

トルストイは直ぐ眼の前に、跛の乞食が立つてゐるのを見た。施し物をしようとして、彼がポケットに手を突込んだ一刹那、要塞の中から重い靴音を引摺りながら、一人の番兵が顔を出した。すると、今までトルストイの手許ばかり見詰めてゐた乞食は、吃驚してびつこをひきひき、宿無し狗のやうに直ぐ前の歴山公園の樹蔭に逃げ込んでしまつた。番兵はその後姿を見送りながら、大聲で口穢く喚き散らしてゐた。

トルストイは番兵の方へ歩み寄つた。そしてきつとした口調で訊いた。

「お前さんは文字が読めるかい。」

「文字ですか。」番兵はついで呢懇のない人の事でも訊かれたやうに、ちよつと考へる眞似をした。「読めます。読めますとも。だが、貴方はまたなんだつてそんな事をお訊きになるんです。」

「ぢや聖書を読んだ事があるかい。」

「聖書？」番兵は自慢らしく鼻をうごめかした。「讀みましたとも。聖書を読まない奴は狗ぢや。」

「それぢや、知つてるだらうが、聖書に『餓ゑたる者に食を與ふる者は』といふ事があるねあれをどう思ふかね。」

トルストイは毛むくぢやらかな顔で覗き込むやうにした。

兵卒はそのまま地獄に跳ね飛ばされはしまいかと氣遣ふやうに、じつと眼を見据ゑてゐたが、暫くすると、ほつと息を吐いた。

「それぢや伺ひますが、貴方は文字がお読めになりますか。」

「読めるともさ。」トルストイは鼻をつままれたやうに顔をくしゃくしゃさせた。「なんだつてそんな事を訊くんさい。」

「ぢや、軍律をお読みになつた事がありますか。」

「ない。ないが、どうしたんだ。」

「それぢや餘計な口を利かないやうにして下さう。」

兵卒は急に元氣づいて肩を聳やかした。

「私は軍律に従つてゐるんですからね。」

観樹老の嘘

月の十六日京都に入つて來た三浦観樹老人が、一代の狸爺たるは知らぬ人もあるまい。

この前観樹老人がこつそり京都へやつて來た時、ある通信社の記者が、それを嗅ぎ出して寝起きを押へようと、朝つばらからその旅館に出掛けて行つたものだ。老人はもう起き上つて、厚ぼつたい座蒲團の上にちよこなんと坐つてゐた。

訪問記者は、やつと狸の居どころを突きとめたやうに得意になつて訊いた。

「今度は何の御用事でお下りになつたんですか。」

「たうとう捉まつたか。」老人はわざとらしく困つたやうな顔をした。「君たちに會つてはともかなはんよ。實は今度は祕密の用事で誰にも知らさないで、こつそり出かけて來たんだが……」

「祕密の用事とおつしやると、——やはり寺内閣の。」

若い記者は獲物を嗅ぎつけた狗のやうに鼻をびくびくさせた。

「どうだかな。實は今朝これから田中村の西園寺の許に出掛けて行く筈なんだが……」

老人は軒の燕に立聴きでもされるのを氣遣ふやうに、わざと聲を落した。

「話の都合では、今晚あたり原(敬)めがまたやつて來るかも知れんぞ。」

「原さんがですか……」

若い記者は誰よりも先に、こんな大事件を聞き出した嬉しさに、胸をわくわくさせた。

「さうだよ、原が来るかも知れんて。すると、いづれは内閣の話も出さうなものだ。」

老人はじつと相手の顔を見つめた。若い記者は、ここまで聞けばもう十分だ、あとは大抵想像で見當がつく、何よりも大事なのは他の同業者を出し抜く事だと、あわててお辭儀をして座を立たうとした。

「まあ、待つた、待つた。」老人は狸のやうな手つきをして客を呼びとめた。「と言つたら、君達は喜ぶかも知れないが、今言つた事は皆嘘だよ。俺は嘘を吐くのが大好きでね。」

若い記者は度膽を抜かれたやうな顔をして、また坐り込んだ。老人はそれを見ると、嬉しさに堪へられぬやうに、聲を立ててからからと笑つた。

「若い者に嘘をつくのは、また格別なものだね。」

蠟 マツチ

米國と支那との貿易といへば随分と夥しい金高に上る事だらうが、その夥しい貿易が、もとは蠟マツチ一本から出たのだと聞いては、誰だつてまさかと小首を傾けぬ者はあるまい。だが、それは全くの事實で、生命までもと思ひ込んだ男女の戀なかが、もとは落した手巾を拾つてやつたくらゐの事に過ぎないのは、世間によくある事だ。

五十年前といへば、支那人は歐米人を夷えい扱あつかひにして、酷く毛嫌ひしたものが、その頃支那に渡つて、貿易業を始めたばかりの紐育生れの商人があつた。何一つ取引が出来ない上に、市街へ出れば通りすがりの支那人から白い齒を見せられるので、商人は涙さへあつたら泣き出したい思ひをしたものだ。だが、仕合せな事には、紐育生れのこの商人は、涙はほんの少ししか持合せてゐなかつた。

ある日商人は、市街の關羽の廟で行はれる祭を見に行つた。居合はず人達は各自に蠟燭を持つて、それを振りかざして何かの式をするらしかつた。紐育生れの商人はそれを見ながらポケットから一本の葉巻を取り出し、蠟マツチを擦つて、ぱつとそれに火をつけた。

蠟燭を振つてゐた支那人たちは、一齊に商人の方を見かへつて險しい眼つきをした。商人は慌てて蠟マツチの火を消さうとして、二三度手を振つて見たが、それも無駄だつた、商人は暴やびになつて、強くマツチを振つた。火はどうしても消えなかつた。すると、支那人のなかから、豫て顔馴染の男がつかつかと近寄つて來た。

「やあ、貴方もまた祭の儀式をしてらつしやるんですね。」支那人の險しい眼つきは、いつの間にか面白さうに笑つてゐた。「でも、マツチではいけませんよ、ここに蠟燭があるから差上げませう。」

居合はず支那人は、すつかりこの商人にいい感じを持つやうになつた。お蔭で貿易全體が都合よく運ぶやうになつた。

「何もかも、あの蠟マツチ一本のせゐだ。」

と、商人は後々になつて、往時を想ひ出す度に、それを言ひ言ひした。

新近江八景

滋賀の森知事は、これまでの近江八景が、新時代の風景としては、規模が小さ過ぎるからといつて、新しく一般投票で新時代の八景を募集したといふ事だ。

飲んだくれの村長や、やくざな衆議院議員を拵へるために設けられた投票を、景色の選擇にまで持つて來たのは知事の思ひつきで、投票人に納税價額の制限をもつけないで、一般投票としたのは、森氏が新時代の知事として、面白いところかも知れない。

名古屋に、近江八景の見物を年頃の念願にしてゐる團體がある。旅費と閑暇とはかなり持合せてゐる人達のこととて、それぞれの名所を言傳への文句通りに見物しようといふのだ。石山には名月の夜わざわざ訪ねて行つた。月は縣知事のやうにぽかんとした顔をして空をう

ろついでゐた。比良に雪が降つたといふ記事を新聞で見て、慌てて汽車で駆けつけてみると山には雪がちよつぱりと残つてゐたに過ぎなかつた。

勢田では風邪でも引込んでゐるらしく、血走つた眼をした夕陽を見た。矢走では破れた帆かけ舟を見た。三井寺では汽車の都合があるからといつて、わざわざ頼んで十五分ほど早目に時の鐘を撞いて貰つた。鐘は鐵面皮にもいつもよりは大きい聲で、喚くやうに鳴つた。困つたのは堅田の落雁で、幾度行つて見ても、雁はそこらに見えなかつた。雁はこの人達のやうに有り餘る程の旅費と閑暇とを持合せなかつたのだ。ところが、丁度折よく鳥が三羽そこを通り合はせた。皆は雁の代りに鳥で辛抱する事にした。

一番困つたのは、唐崎の夜の雨だつた。名古屋を雨の日にたつと、唐崎の夜はいつも霽れてゐた。思ひ立つて、やつと三年目に初めて雨の夜に出會す事が出来た。皆は松の下でびしょ濡れになりながら、

「よろしなあ、まるで晝のやうやなも。」

と言つて喜び合つた。ところがその後になつて、妙な事を聞き出して來た者があつた。それ

は唐崎の夜雨といふのは、夜更けて松の葉のこぼれるのが、雨の音に似てゐるからの事で、何も雨に濡れなくともいいのだといふ事なのだ。皆は變な顔をして、もう一度唐崎へ行つたものかどうかといふ事をきめかねてゐる。

捕虜を景品に

瑞西に商人があつた。これまで主に獨逸から商品を輸入してゐたが、先日、豫て取引をしつけてゐる獨逸の註文取りが、久振りにすつと店に入つて來た。註文取りはたつぷりと愛嬌笑ひを見せながら、これまでどほり取引を續けて欲しいと頼んだが、瑞西の商人は苦り切つた顔をしてきつぱりと謝絶つた。

「何かこれまで願つて來た取引に、御不足でもおありなんですか、それとも佛蘭西の方からお仕入れになるお積りでせうか……。」註文取りはちよつと白い齒を見せた。「あちらの出來

だと、同じ品で値段がざつと十割方も張る事を御辛抱なさらなければなりません。」
瑞西の商人は弾きかへすやうに言つた。

「そんな事ぐらゐ我慢します。」

「とんでもないお考へちがひで……」獨逸の注文取りはなかなか諦めようとはしなかつた。

「佛蘭西産だと、値段がお高い上に、私共のやうな品は、とても揃つてはゐません。」

「それも承知してまさ。」瑞西の商人は吐き出すやうに言つた。

「そんなにおつしやるからには、此方様は佛蘭西の兵隊さんにお近づきでもおありになるんですか。」

「有りますよ。」と商人は艶れ氣味に言つた。「甥が一人お國に捕虜になつてまさ。」

「それはどうもお氣の毒さまで……」と注文取りは自分が悪戯でもしたやうにあやまつた。

「それぢやどうか従前通り御注文を下すつて、ついでに甥御様のお名前をもお聞かせ下さいまし。すると近いうちに吃度御放免になるやうにお取計ひ致しますから。」

瑞西の商人はあやふやには思ひながら、兎に角注文は出す事にした。そして普魯西で捕虜

になつてゐる甥の名前と收容所の所書とを渡すと、それから一週間ほど経つて、甥は不具になつた捕虜の幾人と一緒に瑞西に送り歸されて來た。商人は商品を調べるやうにして身體を調べて見たが、何處に創一つあるではなく、達者でびちびちしてゐた。

偽書

芥川龍之介がいつだつたかの『三田文學』に「奉教人の死」といふ短篇小説を書いた。そして、この小説は自分が秘藏してゐる長崎耶穌教會出版の『れげんだ・おれあ』といふ西教徒が勇猛精進の事蹟を書きとめた稀觀書から材料を取つたものだ、この書物は上下二卷美濃紙刷六十頁、草書體交りの平假名文で、上卷の扉には羅匈字で書名を横に書き、その下に漢字で、

御出世以來千五百九十六年慶長元年三月上旬鏤刻也

の二行が縦書にしてある、序文は間々歐文を直譯したかのやうな語法を交へ、一見して伴天連たる西人の手になつた物だらうと思はれるやうな所があると、斷り書まで添へたものだ。

これを読んで一番に物好きの眼を光らせたのは、文壇の老大家U氏だつた。U氏は人に知られた珍書通だけに、自分が今日までこの書物の存在を知らなかつたのを何よりも恥づかしい事に思つて、掌でそつと禿げ上つた額を撫でた。

「れげんだ・おれあ——名前からして珍しい書物だ。是非一つ借りて見なくちや。」

U氏は直ぐ芥川氏あてに手紙を書いて、その珍本の借覽を申込んだ。

芥川氏はその手紙をあけて見た。そしてにやりと皮肉な笑ひを洩らしてゐると、丁度そこへ東洋精藝會社の社長某氏の手紙を持つた、若い男が訪ねて來た。その手紙によると、『三田文學』で御紹介になつた『れげんだ・おれあ』、あれは珍しい書物だと思ふから、上下揃つて三四百圓で譲つては呉れまいかといふ頼みなのだ。

芥川氏は雀の巢のやうにもじやもじやした頭の毛を搔きながら、若い男に言つた。

「この本だと、今Uさんから借覽を申込まれてゐるが、さういふたつての御希望なら、お

譲りしてもいいんだが……」

「それぢや、どうかさういふ御都合に……」若い男は刈立ての頭を叮嚀に下げた。「社長もどんなにか喜ぶでせう。」

芥川氏は當惑さうに手を拱いた。

「ところが、あいにくその本が手許にないんだ。」

「誰かにお貸しにでもなりましたんで。」

「いや、そんな本は僕も讀んだ事がないし、また誰一人見た事はあるまいと思ふんだ。」芥川氏はくすくす笑ひ出した。「君あんな本が有るはずがないぢやないか。あれはただ僕の悪戯だよ。」

「へえ、それぢや偽書といふわけですね。」

若い男は呆つ氣にとられた顔をした。芥川氏はその一刹那、若い男の懷中で財布が龜の子のやうに身を縮かめてゐるのを感じた。

靴の修繕

近く歐米各國を視察に出かける筈の、文學博士G氏は、足に靴を穿いてゐる。水を泳ぐ水鳥は、脚に水掻をつけなければならぬ世の中だ。學者のために途に花を撒かうともしない實世間の世渡りには、大學教授も足に靴を穿かなければならない。——尤もソクラテスは跣足で雅典の市を説教し歩いたさうだが、家に荆棘のやうな女房を持つてゐた身には、雅典の街は羽蒲團のやうに踏み心地がよかつたに相違ない。

博士は足に靴を穿いてゐる。——或る日の事、その靴を足から脱いで、叮嚀に小包郵便に包まうとしてゐるのを見て取つた學生の一人が、不思議さうに訊いた。

「先生、なんだつてそんなに靴をお包みになるんです。」

「東京の靴屋へ送りたいと思つて……」博士は包みかけた小包をまた解して、そのなかから

穿き減らした靴を取出して見せた。「裏がこんなに痛んでるでせう、直しにやらうと思つてるのです。」

成程靴の裏は、學者の生活ほど惨めに擦り減らされてゐた。馬の歩く道も、學者の通る道も、たつた一本しか用意してない日本の市街では、無理もなかつた。

「それにしても、なんだつてわざわざ東京までお送りになるんです。」

學生は俯に落ちなささうに訊いた。

博士は黙つて學生の顔を見た。大學の學生ともあらうものが、このくらゐのことが解らないやうでは、いつそ首でもくくつた方がましだと思つたらしかつた。學者はそつと溜息をついた。

「なんだつて、貴方、東京の店で購つた靴ですから、東京へ送り返すのです。こしらへた家でなくちや直しようがないぢやありませんか。」

學生は聲を立てて笑つた。

「何をおつしやるのです、先生。靴の修繕だつたら、何處の靴屋でも出来るぢやありません

か。」

「え……」博士は皿のやうに眼を見張つた。アメリカを發見したのはコロンブスぢやない、あれは質屋の番頭だつたと言つたところで、これ程には吃驚すまいと思はれる程だつた。

博士は事實を確めるために、一層言葉を丁寧にした。

「ほんたうの事なんですか、唯今承つたのは。實際東京で購つた靴の手入れが、京都でも出來ずでせうかしら。」

「出來ますとも。」學生はじつと可笑しさを噛み殺した。「京都の靴屋でも立派に手入れが出來ますよ。ちやうど學問の仕入れが京都大學でも出來るやうなものですよ。」

「さうでしたか、ちつとも知りませんでした。」

博士は例のやうに隠しから古びた手帖を取出した。そして學生の言ふ通りに、京都の目星しい靴屋の名前を一々克明に書き取つて、最後にアメリカ大陸發見にも比べられる記録の正確さを持つて、

「……年……月……日午後三時發見の事」

と書き足した。

七十二歳の下士官

米國の或る陸軍將校が、最近佛蘭西軍の兵站部を訪ねると、そこに居合はせた司令官の一人で、四十恰好の髯の美しい陸軍大佐は、愛想よく出迎へて、何くれとなく打明けて話をしてくれた。

すると、そこへ袖口に下士の星章一つ附けた老人が入つて來た。髯も頭髮も雪のやうに眞白だつたが、^{たくしや}壯健な性だと思えて、顔は鮭の^{きりみ}切身のやうな色をしてゐた。老人は隠しから一通の書類を取出して、司令官に手渡しすると、殷懃な言葉で訊いた。

「何か他に御用事はございませんでせうか。」

「さあ、さし當つて……」司令官は勞るやうな眼つきで、老人の下士を見た。そして不思議

なほど丁寧な言葉つきで言った。「さし當つて用事といつては無いやうです。」老人はちよつと手を舉げて挨拶をすると、踵の上でくるりと身體の向きを更へて、元氣よく引下つて行つた。

老人の姿が見えなくなると、司令官は米國の將校の方へ向き直つた。そして變な笑ひやうをした。

「あの男が誰だかつて事がお判りですかい。」

「いや判りません。」

客は不思議さうに返事をした。

「親父ですよ、私の……」

司令官はかう言つて、きつと口を結んだ。米國將校はその口許に胡桃の殻のやうな眞面目さを見て取つた。

司令官の話によると、親父さんは當年七十二歳で、多年働いてゐた實業方面をも、一三年前に引退して氣樂に日を送つてゐたが、戦争が始まつてから以來といふもの非常な煩悶に陥

つた。で、たうとう思ひ立つて從軍を願ひ出たが、それには餘りに老け過ぎてゐるので、當局者は容易に肯き入れなかつた。親父さん、躍起になつて運動した結果、やつと許されて割合に仕事の樂な兵站部に働く事になつたが、不思議にも朝夕顔を合はせる上長官は、自分の子息であつた。

「戦争は色々不思議なものを見せてくれます。」

司令官はかう言つて、苦しさうに笑つて見せた。

帽子

皮肉屋のチェスタアトンは、大道のまん中で風に捉られた帽子を追つかけるのは、男子が全力をつくしてやるべき眞面目な大事業だと言つたが、世の中に帽子ほどよく轉がり、帽子ほどよく人のと間違へられるものはない。これを一番よく知つてゐるのは、京都大學の内田

銀藏博士で、博士はどこへ訪ねて行つても、自分の帽子を帽子掛にかけた後、ものの一二分は吃度その前に立つて、釘の番號から恰好までちやんと覚え込む迄は客間に通らうとはしない。——まことに結構な心掛だが、博士がそんなにまでして折角覚え込んだ帽子を、どうかすると相客が間違つてさつさと被つて行く事があるので、そんな時の博士の狼狽さ加減といつたらない。

アメリカのルウズヴェルト氏が、先日或る人の招待で大きなホテルの宴會に招かれて行つた。帽子掛のある室には、齡を取つた黒ん坊の爺さんが一人立つてゐて、來る人、來る人の帽子を、おいそれと無造作に預かつてくれた。お客のなかには相手が老人なのを氣づかつて、

「おい、爺さん、合札が無くつても、間違ひはないだらうな。」

と駄目を押すのがあつた。そんな輩に限つて眞新しい流行型のを被つてゐたが、爺さんは唯一言、

「大丈夫でがすよ。」

と、返事をするに過ぎなかつた。

宴會が濟んで、客はぞろぞろと出て來た。そのなかに苦り切つたルウズヴェルト氏の顔も交つてゐた。黒ん坊の爺さんはル氏の顔を見ると、流行おくれの型の古い鏝の擦りきれた絹帽を取出して手渡しした。食卓語はうまくやつて退けたし、おまけにうまい料理は食べたしするので、ル氏は顔に似合はず、その晩は上機嫌だつた。で、一言爺さんに調弄からかつてみたくなつた。

「おい、この帽子は確かに乃公のかい。」

黒ん坊の爺さんは雄雞のやうに胸を反らした。

「確かに旦那様のお帽子だとお請合は出来ませんが、旦那様が私にお預けになつたのは、確かにこれだけすよ。」

無題 二つ

一
舊い希臘の言傳へに、アンタイオスといふ力士がある。蹠あしづらが地面にくつ着いてゐるうちは、どんな事があつても他人に力負けはしなかつたといふが、さすが希臘人だけに蹠と地面とを結びつけた解釋は偉いと言はなければならぬ。

リンカンといへば、氣難しい顔をしてゐる癖に、冗談が大好きなので名高い政治家だが、ある時知合の議員某氏が訪ねて來た時、あいにくと風邪をひき込んで鼻をつまらせてゐた。議員が氣の毒さうに、

「お風邪ださうですね。この頃の寒さと來ちや、全くやりきれませんからね。」
と言ふと、

「全くやりきれません。」とリンカンは貧乏搖ぎをしながら、じつと自分の足を見つめてゐたが、暫くすると心もち片足を持ちあげて客に見せつけた。「この寒さぢや、私は誰よりも先に風邪を引くだらうと思つてゐたのです。なんだつて、貴方こんな大きな足でせう、地面にくつ着いてゐる所が人並よりすつと多いんですからね。」

世の中にはリンカンのやうに、蹠あしづらが大きいので風邪をひく人があるかも知れないが、それよりも多いのは禿頭から風邪をひく人である。だが、これは餘り大きい聲では言はない方がよい。さういふ人に限つて、

「なに、私のは足から來た風邪ですよ。」

と、リンカン並みに、圖外れに大きな蹠あしづらを鼻先に突きつけようかも知れないから。

二

最近匈牙利のブタペストで珍しい事件があつた。それは或る寡婦さんが、自分に結婚を申込んだ男を撥ねつけたから起きた事なので、男は當年取つて八十九歳の爺さんだつた。

爺さんは、寡婦さんのすげない返事が悲しいと言つて、心臓が干葡萄のやうに萎びるまで
悄気きつてゐたが、たうとう身體を悪くして死んでしまつた。爺さんの言ふのでは、これま
で女に申込んで一度だつて撥ねつけられた事はなかつた。もしか今度の話がうまく纏まれば
ちやうど十五度目の結婚になるわけだつたのださうだ。

氣の毒な爺さんよ、失戀は爺さんにとつて綿入りの外套のやうに、少し目方が重過ぎたや
うだ。

菓子を舐め過ぎて

亞米利加では方々で今盛んに遣歐軍隊の訓練をやつてゐる。先日ポストンの市街を大勢
の軍隊が仰々しく練り歩いた。すると、兩側の家々の窓からは、國旗が數知れず差出されて
拍手の音が嵐のやうに落ちて來た。

この時、市街を通りかかつた英吉利の或る貴婦人があつた。ひどい亞米利加嫌ひで、亞米
利加のものさへ言へば、何一つ好い顔を見せなかつたが、その日も家々の窓からぶら下つ
た米國の國旗を見ると、すぐ顔を歪めた。そしてぶりぶりして連れの女を振り向いた。

「あたし亞米利加の旗を見ると胸が悪くなつてよ。星だの、縞だの、けばけばしいつたらあ
りやしない、まるで有平糖キャンデーのやうよ。」

婦人は、ほんたうに胃が悪くなつたかのやうに唇を噛んだ。

その側に立つてゐたのは、上院議員のロッヂ氏だつた。婦人の聲が餘り高かつたので、言
つた事は筒ぬけにその耳に入つた。

「それはお氣の毒さまですね、奥さん。」ロッヂ氏は婦人の方に振り向いて叮嚀に會釋をした。

「だが、胸が悪くおなりになるといふのは、貴方があまり有平糖キャンデーをしゃぶり過ぎなすつたか
らでせうよ。接吻くらゐで御辛抱になつたらどんなものです。」

武部源藏の裔

大和西大寺の南に、菅原神社といつて、天穗日命と野見宿禰と菅原道真とを一緒に祀つた社がある。そこに詣つた事のある人は、社の直ぐ前に、

武部源藏

と書いた、大きな門札のかかつた家を見掛けたに相違ない。いくら見遁さうたつて、とても見遁す事の出来ないほど大きな門札である。

宿の主人は、長い銀のやうな鬚を持つた老人である。淨瑠璃の「寺子屋」で、源藏に近づきになつてゐる人達が偶に訪ねて行くと、爺さんは長い鬚を扱きながら色々な自慢話をはじめる。

「はい、私の家は御覽の通り代々源藏を名乗つてをりますのや。」と爺さんは、文樂の人形芝居で見覺えた源藏のやうに、物を言ふ時きまつて妙な肩の恰好をして見せる。「初代があの通り道真公にお仕へしたのを御縁に、今だにこんなにして、菅原さんのお側に暮してゐますのや。」

ある時さる客が訪ねて行つて、爺さんを相手に、「寺子屋」の武部源藏は、淨瑠璃の作者が自分と同じ時代に、江戸に武部源内といつて名高い寺子屋の師匠があつた、それから思ひついたのでといふことを話したものだ。すると、爺さんは長い鬚を馬の尻尾のやうに氣忙しく振つた。

「でも、それは武部源内だすやろ、私とこは源藏だすよつてな。淨瑠璃の文句通りに……」客は愛嬌のつもりでちよつと訊いてみた。

「それでは、お宅の一番古い御先祖は……」すると、爺さんは急に得意さうに鼻をうごめかした。

「それが貴方、一向判りよらなんだのを、先日えらい物識りの方がお來なはつて、その方に

承ると、なんでも宅の先祖ちふのは竹田出雲たらいふ途方もない學者だしたさうな。ちやうど道眞公と同じ時代でな……」

世の中には罪な事を教へる人もあるものである。

花の香氣

「お父さん、なんだつて花には匂があるの。」

むかしむかし、ずつとむかし、かう言つて自分の父親に訊ねた子供があつた。父親はその時、世間の多くの親達と同じやうに、くだらない事を考へてゐたか、それとも別に何も考へてゐなかつたか、子供に訊かれて初めて氣がついたやうに、成程花には匂があるわいと思つた。だが、おいそれと直ぐには説明も出来かねたので、急に錢勘定でもしてらしい、忙しさうな顔をした。

「お父さんてば、なんだつて花には匂があるの。」

子供は鼻を鳴らしながらまた訊き直した。父親は毀れかけた目覺し時計を扱ふやうに、だらけた頭にやたらに發條ぜんまいをかけてみたが、その一刹那、花は酒や音楽と同じやうに神様が人間を娛しませるために拵ごしらへられたものだといふ事に氣がついた。

「うむ、花の匂か。」父親は學者のやうに落着いた調子で言つた。「あれは人間を娛しませるために出来てゐるんだ。」

「さう。」と子供は一言言つたきり、そのまま黙つてしまつた。だが、父親の説明に満足してゐないのはその顔色にも讀めた。多くの場合子供は父親の説明には満足しないものである。

子供はそれ以後「なんだつて花には匂があるのだらう。」と、一所懸命にそればかりを考へた。そしていつの間にか大學者になつて、やつとその問題を解く事が出来た。

實を言ふと、花の匂は、いろんな昆蟲をそこに誘きよせて、その力でもつて花の生殖を果すために存在してゐるに過ぎないが、その學者が研究を仕遂げるまでは、世間の人達は何の爲だとも知らなかつた。學者とは誰あらう、名高い植物學者クルト・スプレングルその人で

ある。

数多い世間の父親よ。牛のやうに愚かな頭を持つた世間の父親よ。おん身達がどんな説明をしようと、多くの子供はそれに満足するものではない。そしてその不満足から素晴らしい發明と發見とが生れるものである。

齒と愛國と

米國は病氣治療法を發明する事にかけては、世界第一といつていいほど色々の治療法に富んでゐる。そんな國柄だから、兵卒や水兵を徵集するにも、検査がちよつと外の國の行き方とは異つてゐる。

今度西部戦線へ派遣する軍隊を徵集するに就いて、ある軍醫が執つた方法は、一番風變りなものだつた。軍醫は安全剃刀で剃りあげたばかりの綺麗な頭を撫でまはしながら、自分の

前に立つてゐる一人の應募兵を見た。

「お前、身體は健康かね。」

「はい、健康でございます。」

應募兵は自慢さうに自分の胸を反らしてみせた。

軍醫は顚顚の邊に残つた少しばかりの髯を氣にしながら言つた。

「一體軍人に必要な健康とは、どんな事なのか知つてるかい。」

「強い足をもつ事です。」

應募兵は自分が飛蝗はつたのやうに強い足を持つてゐるのを見せるために、二三度靴の踵で地面を蹴つてみせた。

「違ふね。軍人の健康といふのはそんなものぢやない。」

「ぢや、遠視の利く眼の事でせう。」

「それも違ふね。」

「ぢや、頭のいい事でせう。」

「違ふよ。」

軍醫はその證據に餘り良くない自分の頭をふつて見せた。

「それぢや、どんな事なんです。」

「いい齒を持つてる事だよ。」

軍醫は猿のやうに白い齒を露いて見せた。

この米國軍醫の説によると、兵卒は無論、いい足と、いい眼と、いい頭とを持たなければならぬが、唯一ついい齒を持たないと食物を嚙む事が出来ない。食物を嚙む事が出来なければ、足があり、眼があり、頭があつても、敵と戦ふ事が出来ないといふのだ。

それなれば、兵卒にいい齒を持たせるには、どうしたら良いかといふのに、それには子供の時より齒に氣をつけさせなければならぬ。つまり母親といふ母親は、始終子供の齒に氣をつける事だけで、男の及ばない愛國的の事業を仕遂げる事が出来るといふのだ。

女の頤鬚

戦争と頤鬚——と言ふと、何の事だらう、と變に小首を傾げる人があるかも知れないが、戦争では平素のやうに、さうさう顔を剃る事も出来ないで、頤鬚は伸び放題に伸びる。それが戦争後もすつとそのまま生やして置かれるかどうかといふ事が、歐洲では今好事家仲間の話題になつてゐる。

日露戦争後、生き残つた兵士の多くが、鼻の下にちよつぱり記念の髭を生やしてゐたのは誰もがよく覚えてゐる事だ。一體髭を生やしたり、剃つたりするのは、何かの機會がないとちよつとやり難いもので、米國でも南北戦争以前までは、今の米國人のやうに、顔を綺麗に剃つたものだが、戦争後は頤鬚を伸ばす事が流行つて、ひとしきりそれが無いものは肩身の狭いやうな思ひをした事さへあつた。

それにつけて、今度の戦争が済んで暫くは、吃度頤鬚の流行する時代が来るだらうと豫言してゐる者がある。——少くとも頤鬚の無いものは、戦争の洗禮を受けなかつた者として、婦人達から蔑まれるに相違ない。婦人に蔑まれまいためには、男子といふ男子は、蛙のやうにとんぼ返りまでもするものである。頤鬚を伸ばすくらゐは何でもない事である。

頤鬚といへば、女にもそれを持つてゐた人達は少くない。日耳曼皇帝マキシミリヤン一世の娘に、長い頤鬚を持つてゐるのがあつたのは名高い話だ。一七〇九年プルトワの戦役で、捕虜になつた或る婦人が、一尺五寸もある頤鬚を生やしてゐるといふので、わざわざ彼得大帝の前に引張り出されて、御感にあづかつた事があつた。やくざな男すら頤鬚を生やさうといふ世の中である。女がそれを眞似たところで少しも差支がない。

居士と大姉

小説家のK氏の家では、先日祖母さんが亡くなつた。いよいよ葬式といふ事になつて、祖母さんが先年血脈をうけた事を思ひ出した遺族の人達は、早速棺のなかへそれを納めようと思つて、故人が一生の間大事にしてゐた箱をあけてみると、何時の間にか戒脈が失くなつてゐるのに氣がついた。

血脈といふものは、手つ取り早く言つたら、女学校の卒業證書みたいなもので、これが失くなつてゐたからといつて、お嫁入には少しも差支ない筈だ。またこれを拾つた人があるにしても、それをもつて自分の持参金代りに嫁入口を捜すわけにもいかない。先づ失くした方にも損が無ければ、拾つた方にも得はゆかない代物だが、それにしても祖母さんが血脈の入つてゐない箱を一生の間大事にかけてゐたかと思ふと、遺族の人達はなんだか變な氣持になつた。

で、檀那寺に頼んで、新しく戒名をつけて貰ふ事にした。お寺の坊さんはけばけばしい色の法衣を引掛けて、鸚哥のやうな風をしてやつて來た。そして勿體ぶつて引導を渡したが、變な事には祖母さんの戒名が、